新島襄と徳富蘇峰

――大学設立運動を中心に――

西田　毅

一

編集部から与えられた題は「新島襄最後の二カ月の回想―新島と徳富蘇峰」であるが、ここでは、新島襄と徳富蘇峰の関わりをもう少し長いスパンでとらえて、新島の晩年、とくに同志社大学設立運動を中心にした両者の交情を概観してみたいと思う。

蘇峰の同志社時代は一八七六（明治九）年から一八八〇（明治一三）年五月、卒業を間近にして退学するまでの約三年半の歳月に過ぎないが、両者の師弟としての関係は、新島の死（一八九〇年一月二三日）に至るまで、一三年間、変ることなく続く。蘇峰の九〇余年の長い生涯において、一三年という時間は短かいともいえるが、その間の両者の濃密な時間の中身からいえば、それは、蘇峰の全生涯に対して決定的な影響を与えるに足る十分な長さであった。後に蘇峰は回顧して、「平生崎嶇険艱（きくけんかん）の運命」を経験したなかで、「新島先生と相知るを得たこと」は「予の生涯に於ける大なる幸福の一」であったと述べている（『我が交遊録』二九三―二九四頁、中央公論社、昭和一三年）。また、かれは、「明治聖代の民であったことと、我が父母の子に生れたることと、先生に接触したるを以て、一生の三大幸運と信ずる」とも語っている（「日本精神と新島精神」〈同志社創立六十周年記念講演〉同志社校友会編『新島先生記念集』一二頁、昭和一五年）。

しかし、新島と蘇峰の精神的距離が常に親疎不変の状態にあったというわけではない。現在、われわれは、『蘇峰自伝』（中央公論社、昭和一〇年）その他の著述を通して、蘇峰の新島に対する敬意と信頼は一貫して変らないことを理解できるが、一八八〇年の学級合併問題に端を発する授業ボイコット騒ぎが機縁で気まずくなって退校したこと、新島の執拗なまでの説得をふりきって新聞記者を志願して上京したこと、さらに、新島からうけた洗礼の返上を申し出るなど蘇峰は師の期待に反する数々の行動に打って出て、両者の気持はしっくりゆかずお互いの感情に齟齬を来たすことも一再ならずあった。

しかし、そうした出来事のたびに新島の示す寛裕な態度が、蘇峰の新島理解を深めることになった。たとえば、仲間と語らって上京を企てた蘇峰が旅費に窮して、こともあろうに新島に借金を申しこんだところ、流石の新島もあきれはて、「徳富の顔は千枚張りではないか」といって憤慨した。そうして、旅費は渡さなかったが、一葉の写真を与えて、その裏に「大人とならんと欲せば、自ら大人と思

ふ勿れ。明治一三年五月二四日」と書いて頂門の一針を与えたという（『我が交遊録』三一四―三一五頁）。このように弟子の非常識を厳しく戒めた新島であるが、別れを告げて同志社を去らんとする蘇峰らに昼食代を餞別として、甥の新島公義に託すなど深い慈愛の心を示した。新島の至情に打たれた蘇峰は昂奮した気分も一時に納まり、「何と言っても先生は我等よりも一枚も二枚も上である。寧ろ再び同志社に帰ろうかと思った」と正直に告白している（『我が交遊録』）。

二

さて、同志社を退学してしばらく東京に滞在した蘇峰は、福地桜痴を訪ねたり、岡松甕谷の紹成書院で学ぶなどの経験をもつが、福地の下で『東京日日新聞』の記者になる道は開けず捲土重来を期して熊本に帰郷した一八八〇年一一月、偶然にも伝道で九州を旅行中の新島と再会を果たした。このときの再会についてかれは「迷へる羊か、山羊かは知らぬが、再び元の羊飼に帰った様な気持が、或は先生にはしたかも知れない。それ程でなくとも、両者の間に蟠りを生ぜんとしたことは、春の薄氷が、春風に吹かれて、忽ち解けたる如き心地が双方の間に出で来った」と述懐している（『我が交遊録』）。

そのあと、蘇峰は、熊本における自由民権運動への参加―相愛社や『東肥新報』での活躍―や大江義塾の開設等の実践を経て、『第一九世紀日本の青年及其教育』（明治一八年）と『将来之日本』（明治一九年）で文名一挙にあがり、爾来、中央の論壇の花形となることは周知の事実である。かくして、一八八〇年の帰郷より一八八六年一二月までのいわゆる「新聞記者準備時代」（『蘇峰先生年譜』六頁、徳富蘇峰文章報国四十年祝賀会、昭和三年）を終えて、一家をあげて上京した蘇峰が、一八八七（明治二〇）年二月に民友社を創設し、雑誌『国民之友』を創刊、さらに一八九〇（明治二三）年二月には宿願の『国民新聞』の発刊にこぎつけるのである。このように、新島の最後の数カ年は、蘇峰にとって、まさに生涯の一大転機ともいうべき重要な繁忙期と重なる。そうして、この時期の二人の関係は、いわば一心同体とでもいうべき同志的結合へと昇華するのであった。

しかも、この二人の緊密な交流を作り出す機縁となったのが、他ならぬ同志社問題、すなわち同志社大学設立の運動であった。明治二〇年前後の新島との間柄にふれて、蘇峰は「とに角同志社大学運動を中心として、予と先生の関係は、これまでに幾十倍するほどの親し味を加へ来った」と述べている（『我が交遊録』）。また、かれは、同志社そのものに対する愛着よりも、新島の大学設立の志を援けることが師に対する恩を報ずるゆえんと考えて力をつくしたとも回想している。此の間の事情は、前掲の『蘇峰先生年譜』や和田守の「年譜」（植手通有編『徳富蘇峰集』筑摩書房、昭和四九年）に詳しいが、一八八八年はじめより、民友社経営のかたわら、大学設立運動に積極的に協力していることがよくわかる。すなわち、一八八八年七月には、同志社専門学校設立運動のための集会が朝野の名士を集めて外務大臣官邸で開かれた。また、一一月には、蘇峰が執筆協力した同志社大学設立の趣意書が『国民之友』第三四号附録に掲載された。翌八九年には、三月に新島が徴兵猶予特典の請願に上京した折、蘇峰がこれを援けており、七月には再び、大隈外相官邸で資金調達の会合を開催し、出席者に義捐金を募ったところ、大隈重信、青木周蔵、渋沢栄一、原

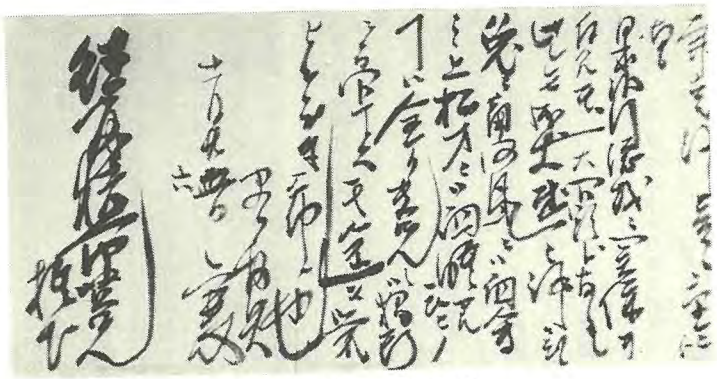
六郎、岩崎弥之助、岩崎久弥、平沼八太郎、大倉喜八郎、益田孝、田中平八らが応募を約束、合計三万円が集まったという（和田守「徳富蘇峰年譜」）。

同年一一月に発表された「同志社大学設立の旨意」では、応募者名薄に井上馨の名前もあがっており、一八八八年四月から一一月までの募金総額は三万一千円になる。なお、同旨意書によれば、同年四月、京都においても智恩院で府下の六百五、六十名の人士を招いて、私立大学設立の趣旨を訴え、府民を対象に募金運動をおこなったことが記述されている。

一八八四（明治一七）年六月から一八八八（明治二一）年四月までの募金額は約一万円に達しており、加えて、A・ハーディーらアメリカの「朋友」より六万ドルの寄附申し込みを得ていた。他に政界の名士では、後藤象二郎、勝海舟、榎本武揚らから物心両面にわたる「翼賛」が得られたことを記している。このように、中央政界の有力者に新島が直接、会見して宿志を開陳したのであるが、その際、こまごまとした周旋の労を取ったのが他ならぬ蘇峰その人であった。そのことは、蘇峰あての新島書簡集（『新島襄全集4』同朋舎、一九八九年）にあきらかであるが、一八八九（明治二二）年一一月一一日付書簡、一一月一六日付書簡、一一月二三日付書簡、一一月二六日付書簡、一一月二八日付書簡、一一月某日付書簡（整理番号七六〇）、一二月九日付書簡（二通）等の書簡では、上毛地方での大学設立運動、大蔵大臣松方正義との会見、松方と河島醇の力を借りて三井や京浜間の資産家に寄附を訴えたいことなどが縷々述べられており、就いては蘇峰にも松方をはじめ関係者への働らきかけを懇請している。また、上毛地方における勢力の拡張については、湯浅治郎の力を借り、横浜の紳商への働らきかけに関しては島田三郎の助力を依頼（島田は募金運動のため、東京横浜方面を分担するよう委嘱することが一八八九年五月の同志社社員会で決定していた）したり、慶応義塾の横浜における募金運動に遅れをとることに強い懸念を示す個所もあり、新島がいかに「大学設立の事業は、実に一大事業なり、全国民の力を藉らずんば、その成就実に覚束な」（『同志社大学設立の旨意』）しとの決意に基づいて死に至る病気とまさに一刻を争いながら奔走する日々を送っていたか、その実相が読む者に如実に伝わってくる。

たとえば、前引の一八八九年一一月二六日付書簡（写真）には、その前の日に前橋に到着した新島が旅の疲れを癒す間もなく、同日、前橋にやってきた島田三郎をわざわざ宿に尋ねて、横浜の資産家（原善三郎、茂木惣兵衛らの名前が誌されている）に交渉してくれるよう協力を依頼したことが述べられている。

そこで、新島は、島田から、松方が彼地の富豪と談判し応募金額を定めた上で、さらに他の者には大臣の添書があれば、かれらに対して新島の企てる大学設立の意義や計画について、島田本人が直接、詳細に説明する労を惜しまないとの約束をとりつけたので、とにかく、蘇峰から松方や河島らに、更に接触を続けて欲しいとひたすら「横浜政略」の成功に睹けている様子がえがかれている。また、同書簡では、蘇峰が松方と会見して、松方を通して川田日銀総裁の関心をひき、東京中の銀行に働らきかけるアイデアを島田から得たことも打ち明けている。そうして、さらに島田の示唆として、松方から小野光景なる人物―慶応義塾では、一八八九年一一月に資金募



新島襄の徳富猪一郎あて書簡

集委員が選ばれたが、小野は京浜地区において委嘱された三七名の委員の中の一人であった（『慶應義塾百年史』（中）二七頁）―に「一通之添書」を送らせ同志社のために尽力するようにとの意を通ずれば、小野が慶応義塾のために奔走することを断念させることができるとの見通しが語られたことを伝えて、この点に関して蘇峰の意見を求めている。

三

慶応義塾は一八八一（明治一四）年以来、福沢を先頭に積極的に募金活動を続けてきたが、一八九〇年の大学部の実現（文学、法律、理財科設置）を目指して、さらに大々的な募金運動を展開していた。すなわち、一八八九年一月には、福沢諭吉、小幡篤次郎、小泉信吉三人の名前で大学資金募集の趣意書（「慶應義塾資本金募集の趣旨」）を発表、中央、地方の富豪篤志家に寄附の勧誘などをおこなっていた。とくに慶応の本拠地である東京や横浜地域には総長小泉信吉を先頭に小幡や伊藤欽亮、門野幾之進、中村道太、松山棟庵、朝吹英二、牛場卓蔵ら有力メンバーが中心になって資金募集委員会を構成、運動の細目について案を練り、着々と工作を進めていた（『慶應義塾百年史』（中）二二一―二二九頁）。

この慶応の動きは余程気にかゝるらしく、新島はさらに一二月九日付の書簡で、体調を崩したかれが「小生も当時無益に床中に伏しおるは実に一日千秋の思なき能はず、機に乗じ進まんと欲して進む能はず、又退く事もならず、床中病魔の一因人と相成候、只々心にかかり候事は松方大臣の横浜商人に開くの談判手後れになり（慶応カ）○○義塾に率先せられぬかの一事なり、島田君には当時所々に出張のよしなれども島田丈けでも早く内相談は開き呉れざるや」と逸る心を抑えがたく、先んずれば人を制すの兵家のコトバを引いて「此活動社会之仕事に於而勝利を得んとなれば必らず此秘訣を活用せざるべからず」と訴えている。こうした焦慮の背景には、上毛地方での活動が思うように進展せず、「敗軍之將」新島というデスペレートな意識に加えて、胃腸カタルの再発と寒冷な気候のために体力も消耗し、漸く死期が近ずいたという自覚も手伝って、新島に、このように切羽詰った文章を書かせたのであろう。

愛弟子の一人横田安止にあてた書簡で、現下の政情不安定も禍して大学設立事業も順調

に進まず、端緒が開きかけて開けず、関東、上州方面の募金運動も漸く軌道に乗らんとしたとき、不運にも「俄に病にかゝり、本月一三日迄も少しの進歩も見へず、寒気は益募り来、奈帝モスコーに而全敗したるが如く空しく帰京致候」と切々と胸中を述べている。しかし「大学募集之端緒之相開候迄は関東に止まり持久之策を立、稍気候之温和なる此大磯之浜辺に蟄居し、他日之雄飛を計る小生之心情は如何なるものぞ、貴君御洞察あれかし」と不退転の決意を吐露している（一八八九年一二月三〇日付）。こうした心境が、やがて、臨終を迎えた新島に送歳の詩（「歳を送りて悲しむことをやめよ病羸の身を、鶏鳴は早くすでに佳辰を報ず、劣才はたとえ済民の策に乏しくとも、尚壮図を抱いて此春を迎う」）をうたわしめ、さらに、「いしかねも透れかしとてひと筋に射る矢にこむる大丈夫の意地」という一句に結晶したのであった。

竹越三叉は、臨終の床にある新島が、「其将さに逝かんとする身にありて、猶ほ壮図を抱き」、「将さに去らんとするや、左右をして日本の地図を出さしめ、伝道の方案を指定し、更に同志社大学の後事を嘱し」たこと、そうして「吉野山花咲く頃の朝な〳〵心にかゝる峯の白雲」の古歌を謡って「安然故旧の嗚咽の中に長逝」したことに触れて、遂に最期の言、「一言の家事に及ぶことなく潔よい死を全うしたと感動している。新島の生涯はあたかも一編の詩歌に比せらるべく「胸中の活火燃へて已まざる、夕暮のダンテ、獄中のミルトン的の手腕を以て画き出したる一大詩歌」であったと述べ、「其行事の亭々たる、其志想の凛々たる、毫も俗らしき所なく英霊活動、常に地上を離るゝ」詩歌は、「其半ばを人間に示したるのみにして其半ばは巻きたるまゝ、白雲一片去って悠々たる」有様を追悼して浪漫的一文を結んでいる。（「新島襄先生長逝す」西田毅編集解説『竹越三叉集』二五八―二六〇頁、三一書房　一九八五年）。

四

新島の教育立国の信念に基づく同志社大学の設立とキリスト教の普及による日本の近代化の達成は、かれにとっていわば畢生の大業であったが、前引の三叉も言及している伝道活動と教育の両者の関係は、新島にあって分離できない「精神的訓練の両面」（山路愛山）であった。山路愛山は、同志社大学設立の運動はキリスト教徒にとっては「最も大胆なる計画」であったと評価する。すなわち、当時の日本の教育の世界において、天下を三分したのが「（帝国）大学及び文部省に隷属する所謂官学」派と大隈重信の東京専門学校、福沢諭吉の慶応義塾の三校であるが、キリスト教徒が設けたミッションスクールはその勢力が未だ微弱で到底此肩することが不可能な状況の下で、新島の企図は「百尺竿頭一歩を進めて、直ちに基督教主義の教育を以て日本教育界に一王国を画せんと欲するもの」であったと主張している（「現代日本教会史論」岡利郎編集解説『山路愛山集』（二）二五八頁、三一書房　一九八五年）。しかも、新島が目指す同志社教育の内容は、単なる「当世有用の人物」の養成ではなく「より高尚なる生活世界」に立たんとする人材、つまり、唯「祈禱讃美をなす宗教家たるのみならず併せて上帝の眼中に於て義とせらるゝ宗教家」の育成を、政治家にしては、「利巧なる政治家」たるにとどまらず「併せて民を愛し国を愛するの政治家」を、また学者にあっては、「能文なる文学者たるに止まらず併せて正義を愛し真理を愛する誠実なる文学者」の育成を期したこと、そう

して人民の理想像としては「衣食に汲々たるのみならず、併せて其品行、性質、気風の上に於て更に高尚甘美の生活を得せしめんとするは彼れの教育主義なりき」と述べて、同じく官学勢力の跋扈に批判的であった「慶応義塾派、専門学校派よりも更に高き壇上に教育を祭らんと欲」したと力説している（前掲『山路愛山集』二五九頁）。

五

蘇峰は、新島の同志社大学運動の意義に触れて、「同志社運動」は同志社それ自身の発展に資することは当然であるが、新島個人に対してもそれは多大の影響を与えたと公言する。明治一四、五年ころの新島と二〇年以後の新島の変化を指摘して、そこには、「心理的大変化」もしくは「大進化」を看取しうると説く（『新島先生記念集』一〇頁）。すなわち、蘇峰の言を今少しくパラフレーズすれば、大学運動を契機に、新島の人脈がより広く豊かなものになってそのことが新島に著しい「進境」をもたらしたということである。従来のキリスト教関係者に偏した狭い交流から、勝海舟や大隈重信、井上馨ら中央の政界や実業界方面の有力者との接触―その多くは蘇峰が直接、紹介の労をとったものと思われる―がすこぶる頻繁となり、それまでのいわば「一種の箱入り娘」の境遇から新島を広汎な日本の社会に紹介することになり、この運動のおかげで新島は、単に「大なる日本の宗教家であるばかりでなく、大なる教育家、大なる社会人、大なる愛国者、大なる公人として天下より認識」されるに至った（『我が交友録』三二二―三二三頁）。また、運動に蘇峰が参加する過程で、二人は同志社の将来構想を中心に、話題もさらに広く、深く日本の現実政治、社会問題等、広範囲にわたって率直な討議を交し、「両者の意向が常に共通し一致していたこと」、読書も蘇峰が興味を抱いた書物を新島に推薦することもしばしばあり、たとえば、V・ユーゴーの小説や『ナインティースリー』などは新島も愛読し、その内容について語りあったという。そこでは、蘇峰が認めるように、二人は、もはや師と弟子という関係を離れて、共通の志の実現に向けて緊密に協力しあう熱い同志の間柄に変貌していたといえるであろう。

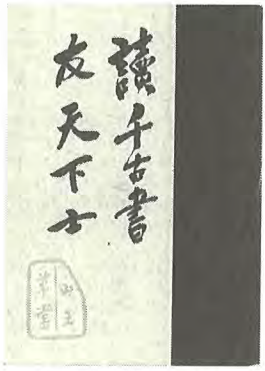
蘇峰の昭和10年代の両著（いずれも中央公論社刊）

新島最晩年の蘇峰あて書簡集（『新島襄全集』3・4巻所収の一八八八―八九年の書簡参照）には、蘇峰が、新島にとって最も信頼のおける「同志」であり、公私万般にわたる諸問題を心を打ち明けて語り得る大切な同志社関係者の一人であったことが鮮明にあらわれている。同志社の教育方針から、同志社大学設立の旨意書の執筆依頼、新島亡き後の後継者の問題―後任の適性のことから選出の方法にいたるまで―、懸案の教会の合併問題、はては、身内の新島公義の一身上の相談事等、そこには、失意の時もあれば得意の時もあり、書簡という性格もあって、喜怒哀楽の感情が実に率直に綴られていて、われわれは、人間新島の苦悩と喜び、さらにまた、目標に向かって真一文字に突き進む張り詰めた心意気に直に触れることができる。

蘇峰は新島の書簡の特徴に言及して次のように述べている。「書簡ハ人ナリトハ、新嶋先

生ニ於テ最モ然リトスル。先生資性敦厚ニシテ恭謹。其ノ演説ニ教業ニ至リテハ、往々声涙倶ニ下ルコトアルモ、恒ニ自省シテ疆リテ感情ヲ抑制ス。但タ書簡ニ於テハ、雲飛ヒ泉迸リ鳥啼キ花笑フ。先生ノ心地自然ニ発露シ来ル。故ニ先生ノ真面目ヲ識ラント欲セバ、其ノ書簡ヲ見ルニ若クハナシ」と（『新島先生書簡集』序文、同志社校友会　昭和一七年）。

新島と蘇峰の「同心一体」の働らきのコーダは、何といっても大磯における遺言執筆の一事であろう。新島の臨終の顚末は『国民之友』をはじめ、『蘇峰自伝』その他にくわしいが、『国民新聞』発刊を直前にして準備に忙殺されていた一月二〇日、「先生危篤」の電報が蘇峰のもとに届いた。取るものも取敢えず大磯の百足屋に急いだが、心臓病に苦しむ新島



『我が交遊録』の表紙

の呻吟の声は門外にも聞えていたという。それから二三日午後の新島の絶命の瞬間まで、殆ど旅装の「フロックコートの著詰めにて、徹夜の看護をした」（『蘇峰自伝』二六一―二六二頁）。枕頭に坐したのは他に小崎弘道と夫人の新島八重であった。新島は今はの際に様々の遺言をしたが、その悉くを蘇峰が筆記した。『新島襄全集』第4巻に収録されている遺言は、「一月二一日午前五時半遺言の条々」（同志社の前途の基本方針、同志社教育の目的、学生生徒の教育の方法―生徒を鄭重に取扱い、倜儻不羈なる書生を圧束すべからずして天下の人材を養成すべきこと―、後任者の件、東京に政法理財学部を設置すること、日本人教師と外国人教師のあつれきの解消に努めること等、同志社人にとってポピュラーな内容の遺言）、「一月二一日午前の遺言」（学外、学内の知名士、知友、生徒ら個人にあてた遺言）、「一月二二日五時一五分午前の遺言」（「芳野の山花咲く頃の朝な〳〵心に懸る峰の白雲」、「天を怨みす人を咎めす」他）、「一月二三日午前三時五十分の遺言」（断片的な数語の言）等からなり、それらはわきで見ているのも苦痛に感ぜられる程の重い病苦の中から絶え絶えに発せられる言葉を一語また一語とあたかも落ち葉を拾い集めるようにして蘇峰の手で書き留められたものである。

なお、個人あて遺言状のうち、波多野培根、井上馨、横田安止については、新島の死後、四月一日付で、新島八重子、徳富猪一郎、小崎弘道の三者連署で「拝呈」されている。『全集』に収録されている他の原六郎、北垣国道、渋沢栄一のものについても恐らく同様の措置がなされたものと思われる。

学外の知名士にあてた遺言状には、「是迄同志社大学ノ為メニハ不一方御高配被成下候儀奉感佩候、小生没後モ行末長ク御心ニ懸ケ被成下度乍此上懇請申上候」（井上馨あて遺言、傍点筆者）とあり、また同志社の学生あての遺言状には「何卒将来ノ同志社ノ骨子ノ一トナリ以テ尽力セラレン事ヲ切望ス」（波多野培根あて遺言）と書かれている。いずれも、自らの分身としての同志社の将来に思いを馳せた切々たる至情の流露である。しかし、遺言や書簡集を通読して改めて思うことは、精魂こめて後世に伝えんとするそのメッセージには、教育と伝道という公事の成功に賭けた執念と同時に、竹越三叉のいう「家事」＝私事へ

の潔い断念が感ぜられて一種の爽快感を覚える。

六

一九三〇年代の蘇峰は、前掲の「日本精神と新島精神」の一文にみられるように、新島の人となりを情熱の人、「熱誠なる愛国者」、日本の志士と論じてやまない。しかしその新島も、幕末から明治維新の激動期に、一〇年という「長過ぎた」海外生活によって濃厚な「米国的教養」を身につけたため、帰国後しばらくの間は何となく時勢としっくり調子が合わなかった。ところが、漸く「時勢と気息相通じ愈よ其の波に乗り、其の潮に鞭たんとする」刹那に不幸にして不帰の客となったと蘇峰は観る。

また、晩年になって新島が「米国的教養を超脱して、先生本然の日本男児に復帰するは、堕落ではなく進歩」であると評価する。そうして、この「進歩」のゆきつくところ、もし新島が今日在世であれば、「必らずや先生も亦我等と与に、皇室中心主義者となり、日本精神の宣揚者となること」必定なりと断ずるのである（『新島先生記念集』一六頁）。人を論評するに、常に「時代と環境」の考察を重視した蘇峰は、かつて、新島を成功せる吉田松陰と看じ、泰西文明の「二大原素」の一たる「精神的道徳の文明」の移入者としてその教育主義を評価した（「福沢諭吉君と新島襄君」『国民之友』第一七号、明治二一年三月）。そうして、昭和一〇年代において「日本帝国の忠良なる臣民」認識が展開せられるのである。しかし、後者の新島理解はあまりにも三〇年代の蘇峰自身の極端な国家主義的境涯に引き寄せ過ぎた見方であるといわざるを得ない。蘇峰の新島論の微妙な変遷を跡付けることはここでの小稿の課題ではない。唯、新島が「日本帝国の忠良なる臣民」イメージといかに実相を異にしていたかは、今日、容易に把握しうるであろう。新島は、周知のように、南北戦争直後のニューイングランドにおけるピューリタンの「流風余韻」漂う中で自由自治、独立、高潔な徳目を深く身につけた人であった。つまり、そのナショナリズム（愛国心）はあくまでも、普遍主義的なキリスト教的リベラリズムに裏打ちされたもので、あの一五年戦争期の偏狭な日本主義とは到底あい入れないものであることは今更喋々するまでもない。

蘇峰は、また、新島の志を成す途として、唯だ「精神を体得せば可。その作用の如きは須らく時勢と与に変化せねばならぬ」と語っている。具体的な個々の「形跡」にとらわれたり、模倣を事とせず、精神を「新たなる時態に適応せしめ」る必要（『新島先生記念集』一六―一七頁）の謂であるが、新島精神の継承の方法論としてはけだし傾聴に値する発言であろう。

二十一世紀を指呼の間にして、日本の指導的な高等教育・研究機関として、われわれはいかなる同志社発展の方策を見出すべきなのか。まさに今、「新たなる時態」への校祖の精神の「適応」のために、大いなる創造力と創意工夫が期待されているときといわざるを得ない。

（大学法学部教授）

新島襄と前橋・上毛の人々

原　誠

新島はその生涯を通して合計十回、上州を訪れている。十回もというべきか、十回しかというべきか。

群馬県下の小学校の子供達は毎年秋になると「上毛かるた」の練習に熱をあげる。その中に「平和の使い　新島襄」という一札がある。群馬で新島の名前はよく知られている。しかしその認識は、一部の人々を除いては新島は群馬で生まれ育ち、幕末期に国禁を犯してアメリカに渡った英雄で郷土の偉人、という程度のもので、その中には誤解さえある。新島が江戸藩邸で生まれたことや、十回しか上州に足を運んだことがないことを含め、その生涯の概略を正確に知る人は多くはない。

同じように内村についても「心の灯台　内村鑑三」というのがあるが、その認識も同じ程度のようだ。

人の思想と気風をその地域の天然や風土との関係で考える考え方によると、内村は新島と同様、高崎藩江戸藩邸で生まれながら、現在の高崎公園内に「上州人の碑」があり、内村自身自分が上州人であることの自覚を持って作られた漢詩がある。

上州無知亦無才　剛毅木訥易被欺
唯以正直接万人　至誠依神期勝利

群馬県人の気質が卒直で欺かれ易いというものである。内村にはその性格を見い出すのは容易なことのように思われるが、では新島には上州人の気質はどの程度明らかなのだろうか。それは十回しか上州入りをしなかったからなのだろうか。しかし内村の方が上州に足跡を残した事跡ははるかに少ない。

今、われわれは新島の筆になる上州の自然、天然および上州人の気質、気風というものについて直接書いたものを知ることは困難だ。思うに、これはおそらく新島には上州に限らずその気風や風土によって規定されるような性格によってではない、もっと違った、いわば普遍的本質的な人と人との出合いと連がりを作り上げることができる、もっとナイーブな人間性があった。生涯を通して函館の福士、ボストンのハーディー、あるいは京都の山本ら、その他新島の生涯の節目にとって決定的に重要だった人々との出会いの中味を考えてみると、新島自身の人間性そのものが人を動かし、人を信頼させ、人を受け入れさせる何かがあり、それは新島を狭い意味での上州人の気質と同質性による協同作業というものとはもっと異なった人間関係を作り上げた生涯であった。

では、その新島にとって上州とは、上州人とはいかなる意味を持っていたのだろうか。

森中章光先生の作製された「新島先生詳年譜」によってこの十回をたどってみる。

第一回目、一八六〇年春。藩主板倉勝殷の護衛をして、初めて安中へ。（一八歳）

第二回目、一八七四年十一月二八日。アメリカから帰国した直後、両親の住む安中へ。十二月二六日まで滞在して、安中にキリスト教の種を播く。（三二歳）

第三回目、一八七八年三月二八日。高崎から人力車に乗って安中へ。伝道集会と安中教会の設立式と設立会員への授洗。四月三日に高崎に向う。（三六歳）

第四回目、一八七九年二月七日。東京から安中へ。礼拝説教。二月十日まで。安中教会はいまだ専任の牧師を持たず。（三七歳）

第五回目、一八七九年十一月。七日に執行された海老名の按手礼式のため。詳細日不明。（三七歳）

第六回目、一八八二年七月十一日。初めて信州から安中に入る。安中、原市、松井田で説教。高崎、倉賀野、玉村、太田を経て栃木に抜ける伝道旅行。上州は七月一九日まで。（四十歳）

第七回目、一八八三年五月一九日。この年の四月に公表した「同志社大学設立旨趣」によって具体的な設立運動、募金活動に入るが、この年の第三回全国基督教信徒大親睦会に出席ののち安中に到る。安中で伝道説教。帰京の途上、高崎で募金活動。五月二一日まで。（四一歳）

第八回目、一八八六年一月二六日。前橋、高崎、安中、原市を訪問のため上州へ。特に原市の半田宇平次よりの七〇〇円の寄付を謝す。（四四歳）

第九回目、一八八八年七月二四日、募金活動のために上京し、健康を害して前橋へ。二七日、前橋から駕籠に乗って伊香保へ。千明（ちぎら）の山荘で療養。上州の各層の人々が伊香保に見舞う。九月一五日に前橋、一八日に東京。新島自身安中に足を運ぶことはなかった。五六日におよぶ上州滞在。（四五歳）

第十回目、一八八九年十一月二五日。最後の上州行きとなる。東京での募金活動の延長として前橋へ。二八日夜「俄かに腸胃の痛みを覚え」、臥床の生活となり、十二月十三日東京へ。募金活動の志半ばにして十二月二七日、大磯の百足屋に。（四七歳）

翌一八九〇年一月二三日召天。

この十度の新島と上州の人々との出会いを今ふりかえってみると、徐々にその内容が変化してゆくのを見ることができる。

アメリカから帰国した直後の上州行きは、何よりも両親・家族に会うためであり、キリスト教伝道が目的ではなかった。しかしこの時に播いた種が成長してくるにしたがって、自分のいまや郷里となった安中に海老名を送り、安中教会の成長に力と祈りを注ぐ。それは安中の人々の心情が「キリストを信ずるというよりも新島を信ずるということであり、キリストを経由して神に近づくというよりも新島を経由して神に近づく（森岡清美『日本の近代社会とキリスト教』）というものであった。

そして六回目の上州旅行は国内伝道旅行の一環であり、七回目以降は大学設立のための募金活動であった。九回目と最後の十回目には、ついに安中に足をのばすことができなかった。九回目の伊香保滞在が最も長い上州滞在となったが、これとても静養に努めつつも募金活動は継続しているし、最後となった前

橋行きも募金活動のためであった。そして、この時が新島にとって最後の募金活動となり、この志半ばにして上州を去り、再び立つことがなかった。

「新島襄先生年譜」によれば、最後となった上州行きは、井上馨、青木周蔵の紹介状を得た新島が、群馬県知事佐藤與造を訪ねて大学の計画と資金募集について助力を得ることであり、県庁で第一部長、第二部長、収税長、警部長、郡長に会い、さらに県庁のクラブに県内の銀行家、町長、郡長、書記、豪商らを招いて小集会を開き、また町長の周旋によって町役人六十人を集めて演説するというものであった。新島が「半夜、俄カニ腸胃ノ痛ミヲ覚」えて床を得たのは、まさにこのような募金活動の真っただ中においてであった。

このように新島の最後となった前橋での活動は、他の土地の場合と同様、その土地の有力者を集めて大学の設立の目的を述べ、協力と援助を受けたいという、いわばビジネストークに近い場であったことがわかる。

しかし、ここ上州にあっては、たんなるビジネストークにとどまらず安中教会で直接新島や海老名に薫陶を受けた人々が、その人間的輪を拡げて、いわば毛細血管のように上州の人脈の中に染み込んでいたのであった。直接新島から人格的影響を受けたのは湯浅治郎や半田宇平次、半田平治郎、斉藤寿雄、関農夫雄ら。彼らは新島の説く新しいキリスト教の世界観に生き、それを上州の地で実践し展開していたのである。播かれた種が成長し、子供が青年になるしたがって、種は花を開き、実を結び、自主的な活動を開始し、新島を師とし自らは弟子でありつつ、協力者として上州での新島の活動を支えることとなる。

彼らは上州の民衆の海の中で、たとえば自由民権運動や廃娼運動のリーダーとなっていった。それは民衆の中から突出した浮き上ったリーダーではなく、廃娼運動の時に県下に二八もの支部をもつ上毛青年連合会という連合組織を作るなど、新島のもたらしたキリスト教の世界観が、直接薫陶を受けた人々を媒介として、上州の地域の大衆の中に生き、理念たりえたのであった。

ふたたび、新島の最後の活動となった前橋での活動をたどってみよう。

一八八九年十一月二五日、新島は前橋に到着すると前橋教会員弁護士、関農夫雄の家に滞在して募金活動に着手するが、二八日、発病する。最初に治療にあたったのは、前橋教会員医師後藤源久郎、看病にあたったのは前橋教会牧師不破唯次郎夫人ユウ。十二月十三日の朝、上毛のキリスト教青年信徒らの求めに応じて漢詩を与える。

社会矯風之元気　基於信基督
人心改良之精神　生於愛基督

そしてこの日、前橋を立った。

募金活動の「壮図」の半ば、東京への道すがら、新島は敗軍の将を思って、さらに一詩を作る。

秋風肅颯渡刀川　欲去尚看両野天
新雁不知孤客意　聲々鳴到赤峰邊

しかし、新島には、かつては彼を父ともあおいでいた弟子たちが、たくましく地域の中に生長し、今や新島の意志を体して協力できるようになっていたことは、慰めであったにちがいない。

（新島学園女子短期大学助教授）

最後の日記「漫遊記事」に見える新島襄の心事について

杉井六郎

(一)

この日記は明治二十二年（一八八九）十一月から書き始められる。全七十九丁のこの簿冊は渋茶色の表紙に「漫遊記事」とあって、「明治廿二年十一月」としるしている。

羈旅の日記をいろいろと簿冊をかえ、あるいは同じ簿冊に書き足して、重ねて使うこともあった新島襄にとって、この丁数のある冊子を使って羈旅の記事を書き綴ることを意図したことは、宿痾をもつ身として、まさに壮絶なまでの計画を抱いての起筆であったことが考えられる。それはこの地上におけるすさまじいまでの「壮心不止」の牧会伝道と大学のことにかかわっていたことが知られる。しかし、この冊子はついにはじめの二十二丁と巻末の三丁分を使用したにとどまり、二十三年一月十五日までの羈旅の記事で終ることとなった。したがって、この日記は新島の未完の羈旅の「遺書」でもある。冊子に添付されている紙片に見える「新雁不知孤客意、声々鳴到赤峰辺」は、まさに蕉翁の荒野をかけめぐる思いに似ているといってよい。

(二)

この冊子の終りの三丁分の記事（全集五、四一〇～四一三ページ）は明治二十二年十二月十三日の広津友信宛（全集四、七六七号書簡）発信覚えをはじめにして、冊子の末尾左隅から逆順に書き進められ、二十三年一月十六日の広津友信宛（同、八〇九号書簡）、河波荒次郎宛（同、八一〇号書簡）発信覚えに至って終っている。したがって、この「漫遊記事」の結末は前から書き進めた筆と、末尾から書きしるした記事が、中に丁数では五十五丁の空白を残しながら完全に完結する形がとられ、始終の仕末が整っているといってよい。その意味では、この「漫遊記事」はこの世における羈旅の記録を自らの力が及ぶ限り、最後まで書き留めようとした新島の姿勢を示しており、まさに来簡に接しては筆を執り、客旅の人を思っては筆を馳せ、生涯の限りを道を伝えることに傾けた姿をとどめて、そのままである。

(三)

表紙裏の記載は、この冊子の起筆に当って抱懐した深い思いを伝えるものと見るべきであろう。いま、その記載は次の通りである。

一将功成万骨枯
労心苦行之退去解除に逢ふを聞き　群

雲に磨かれて輝く秋の月
平生鉄石心
四方本是丈夫事　安用一生無別離

冒頭の「一将功成云々」は唐の曹松の乙亥歳の詩の一句であり、筆太にしるしている。新島が何を考えてこの著名な警句をしるしたか、自らをその一将と意識し、この句を自戒とすることにはなじまぬものを思いながら、その深い含意を推し測かることができない。この年に新島につきまとう悲愁と孤独感を思うは行き過ぎであろうか。後にしるされている「四方本是丈夫事云々」は杜甫の「丈夫四方志　安可辞固窮」によっていると思われ、鉄石の心によって男子の業を進めるに当って孤独な羈旅の厳しい覚悟と通ずるものがあると思わざるをえない。

行を改めて細字で書いている詞書以下は上州勢多郡黒保根村の新井亳に保安条例による「退去解除」を祝して詠じたもので、この特赦は二十一年十二月三日におこなわれており、新島は彼に電報を打ってこれを祝っているから、この句作は、それからあまり時の移らぬときに成立したとしてよい。したがって一年近くも経過して、この冊子を書きはじめるに当って、ことさらにこの句を書きしるしたのは、この度の羈旅と上州における大学運動とは深い関連をもち、また上州の人に託する思いがきわめて強かったことによると見てよいであろう。

㈣

上毛から「敗軍の将」の思いで帰った新島が傷心のなかでしるしている「述懐」(全集五、四〇四ページ)はきわめて大切である。その「述懐」と題する詩は次の通りである。

看山高巍々　観海濶洋々
味得造化妙　小心少発揚

この詩は二十二年十二月二十日付吉田賢輔宛(同、七七五号書簡)、十二月二十八日付広津友信宛(同、七八二号書簡)十二月三十日付横田安止宛(同、七八八号書簡)にも見える。東京に帰った新島は現に魏々たる山や濶洋な海を見ることはない。むしろ眼前に彷彿とするのは、さきにも触れた通り、秋風蕭颯の利根川と赤城の姿であろう。そうした中で、新島が「味得造化妙」とし、「小心少発揚」と詠ずるのは、単なる言辞の遊びとするには情勢はきわめて厳しかったわけで、新島の中に壮絶なまでの不退転の形で生起する「造化」の「味得」がなければこの詩は生れるとは考えられない。この「述懐」が川田甕江塾に通った先師吉田賢輔に斧正を仰いでいることも深い思入れがあったことを知らされる。

㈤

上州における運動について、後事をすべて湯浅治郎に託そうとしたことにかかわるくだりは、新島襄と湯浅治郎の間に生起する――新島の帰国以来築かれてきた絆にまして――冥契の深く、かつ重いことをしのばせる。

新島が教会合同問題に当って、湯浅の動きに不安を感じたことは二十一年十月九日付徳富猪一郎宛(全集三、四八六号書簡)、同月二十二日付不破唯次郎・杉田潮・杉山重義・奈須義質ら宛(同、四九〇号書簡)に見える。その湯浅に新島は上州の後事をすべて依頼した。しかし、湯浅は新島のこの申出を応諾しなかった。日記は次の如くしるしている。

「湯浅氏ニ後ノ取締ヲ頼ミシニ、時間ナキ

ヲ以テ辞ス、氏ノ情実心情モ是迄ノ事ナリ、決シテ不人情ト云フ訳ニハ非ラサルベキモ、同人ハ同人ノ力ニテハ多分ノ事ノ成ラサルヨリ辞セシナランカ」と。「是迄ノ事」とする新島の重い落胆は大きい。しかし一方、湯浅が断った理由を新島は忖度する。そこには新島の深いゆるしをうかがわしめる。後日の湯浅の働きはこの深い交わりの妙に基づいていることは想像に難くない。

(六)

大磯における元旦、新島はこの日「筆ヲ試ミ」、「自作等ヲ書慰ミ」、書初めをおこなった。日記にしるされている「元旦之作」は次の通りしるされている。

歳月如流不待人　鶏鳴早已報佳辰
劣才縦乏済民策　尚抱壮図迎此春

この詩は一月七日付広津友信宛（全集四、八〇三号書簡）、十五日付青柳新米宛（同、八〇八号書簡）。十七日付時岡恵吉宛（同、八一六号書簡）にも見え、とくに広津宛の書簡にはこの詩の説明をしるして「新年之作ハ左の通改め申候、起句丈ケ改候也」としているから、この詩の第一句の素型はよく知られる「送歳休悲病羸身」であったことが明らかである。新島の没後すでにその揮毫が配ばられていた旧作を支持して「右養病於大磯迎廿三年之春」の詞書のある複製がいまもひろくおこなわれているが、当年の八〇八号、八一六号両書簡にはともに「病ヲ養フ」の一句は用いられていない。新島の内奥には前向きの「時」が形成されていたことが明らかである。

(七)

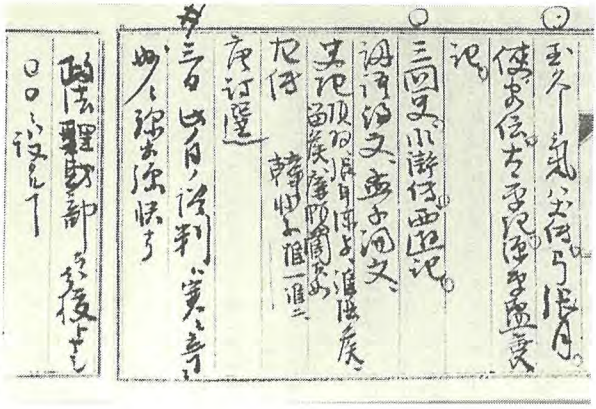
一月五日とする次の和歌も「廿三年之春を迎へて」とあるから「元旦之作」と見てよい。

石かねも透れかしとてひとすしに
射る矢にこむるますら雄の意地

この歌は七日付広津友信宛、十日付北垣国道宛（八〇四号書簡）、十五日付青柳新米宛、十七日付時岡恵吉宛書簡に見える。ただ後二者宛には「いわかねも透れと放つ大丈夫のこころの矢さき神のまに〳〵」と改められており、それは池袋清風の点添によることがよく知られている。しかし、新島は八重の催す一月十四日の誕生祝いに間に合うように、池袋の点添による歌でなく、自分のはじめの歌を半切に三枚大書して松蔭町に送った。

十日付新島八重宛（同、八〇五号書簡）には、「私のあるまほしき昔の関東武士の如き歌」、「私の歌ハあらこなしの出来ぬあはれ馬」と言い送っていることは、新島家で陽暦に換算した誕生日を祝うのではなく、旧暦の日を守っていたこととともに、新島の執着する「関東武士」のこころばせを知ることができよう。半切の書幅の分配案は、「お前様へさし上候分は決して他ニ御譲りなく、往々は表具なしをき被下度候、別ニ一枚ハ内々横田ニ御渡し被下、又他之一枚ハかの人々が所望ならば闘(クジ)になし、当りし者に御渡し被下度候、もし横田氏ニ当らは何とか申分を立、他之三人之内ニ御譲り之方よろしかるへし」と八重に言い送っている。

いかに横田安止に期待することが大きかったかを知らされる。なお、クジ引きの結果を新島は大磯で待ち望んだ。「定而今日ハ御文来るへしと待居候に、夕景に御文参り拝見」と一月十七日付八重宛（同、八一五号書簡）は書



「玉くしげ」以下の記事

き出して、「腹ももぢりて笑申候」と仕組んだ茶目っ気の果を述べている。

(八)

「漫遊記事」の奇しい秘奥の記事は、一月二日と三日の記事の間に書かれている次の一節であろう。

⊙玉くしけ。八大伝。弓張月。俠客伝。太平記。源平盛衰記。

○三国史〔志〕　水滸伝。西遊記。

論語論文、孟子論文、

史記項羽、張良陳餘、准陰侯留侯、廉頗、藺相如

左伝　韓非子　惟一淮二、

唐詩選

これは大磯の百足屋における枕頭、坐右の書か、あるいはその覚書きか、そしてこの時期に何を意識してこれを書き留めたか。いずれも新島の秘奥にかかわることである。

新島は二十二年の春、神戸諏訪山和楽園で静養していたおり、徳富猪一郎（民友社）から坐右の書十冊について回答を求められた。新島はそのとき、「此三四年ハ全く病気之為ニ侵サレ、其余力ハ学校之為、又殊ニ大学之為ニ費し居、別而書籍界ニハ身を寄不申候間、乍遺憾御求ニ応し難く候」（全集四、六〇三号書簡）と、ことわったことがあった。『国民之友』にはやがて六十余名におよぶ人びとの「書目十種」が掲載された。

一月二日、徳富猪一郎、小崎弘道、金森通倫の三人を迎える。「此ノ日ノ談判ハ実ニ奇々妙々、弥出弥快」と新島はしるしている。新島は徳富に果しえなかった責を、彼等の帰っていった後、「火のきへた」ようなしじまの中で、考えて筆をはしらせたのであろうか。

とまれ、新島襄の残照のもつ大きな示唆の一つであることは疑いない。（大学名誉教授）

新島襄と広津友信

本井康博

夢は越後をかけめぐる

新島襄の最晩年の関心は越後伝道に集中していた。「小生ノ心ハ新潟県下ノ為ニ燃ヘテ止マス、焔々ノ火ハ恰浅間嶽上ノ烟ノ如シ」であった（『新島襄全集』Ⅳ二六九頁。以下『全集』）。

大磯の百足屋の病床から彼は越後で伝道に従事する三人の教え子たちに伝道上の指示と助言とを次々と書き送った。三人とは新発田（しばた）の原忠美、長岡の時岡恵吉、それに新潟市の広津友信であった。このうち原と時岡とにあてた書簡が新島の絶筆となった（拙稿「新島襄と新潟伝道」、『新島研究』四七参照）。

三人の中では広津への信任がとりわけ大きかった。そのことは新島が最後の三カ月間に十一通もの書簡を彼に送っている一事からも明白である。ちなみに知られている広津友信――一八八九年一月以前は友吉（『全集』Ⅴ四三一頁）――あての新島書簡（推定を含めて）は全部で十七通で、いずれも近刊の『全集』に収録されている。

その一節にいう。

「小生ハ大磯ニ来リ、昨日夜ハメツラシク八時間寝ネタリ、今朝ハ全ク筆ヲ把ラサルノ覚悟ナリシモ、思ハス一度新潟ニ飛ヒ、如何トモ胸中ノ噴火ヲ支ヘ難ク、遂ニ四間足ラスノ長文トナリタリ」（『全集』Ⅳ二九五頁）

およそ七メートルにもおよぶ巻紙でさえも新島の思いをあまねく伝えるには短かすぎた。「貴君ニ書ヲ送リ申候度毎ニ、貴君ニハ面会閑話致度切望シテ止マサルナリ」（同前二九二頁）。

死のまぎわ、新島は広津によほど「面会閑話」したかったのか、電報で特別に病床に呼びよせたようである。看護婦によれば、新島は広津がくるのを今か今かと待ちわび、汽車の汽笛がなるたびに「広津が来たのではないか」と問うたという。が、広津は「到々まに合ひませんでした」（不破ゆう子「発病の想ひ出そのほか」、『同志社校友同窓会報』九五）。子どものいない新島には、数多い教え子の中でも広津はとりわけて「襄の子」であった。

この広津とは、それより三カ月前（十月二十日）に東京で面談したのが最後の別れとなった。広津はこの時、新潟市に赴任の途次であった。新島は彼にせんべつを与えて前途を祝した（『全集』Ⅳ二二二―二二三頁）。

新島は翌朝、あらためて激励の書とせんべつ金とを使者に託し広津のもとにとどけている（『全集』Ⅳ二二二―二二三頁）。発信月日が不明の新島書簡（同前Ⅳ三九四―三九五頁）

もこの朝いそいで認められ、広津に手渡されたのではないだろうか。それが事実なら、広津は新島の依頼で倉賀野、与板、長岡などにたち寄って関係者に面談したうえ新潟に入ったことになる。

広津は六月に同志社神学科（本科）を卒業したばかりで、成瀬仁蔵の後任として新潟第一基督教会（現日本キリスト教団新潟教会）の二代目伝道師に招かれたのである。着任は十月三十一日であった（A Letter of H. B. Newell, Dec. 20, 1889）。

新潟市は広津には未知の土地ではなかった。すでに前年の夏休みに夏期伝道を経験していた（『全集』Ⅲ六二五頁）。したがって、表面上は順当な人選に見えたが、実は人材不足のためやむなく新潟に送りこまれたのである。

もともと広津には「洋行ノ企」があったものを「無理ニ頼」んでそれを延ばし、「只々一カ年間ノ御約束」で新潟行きが実現したにすぎなかった。ところが赴任後、どういうわけか任期に関し教会との間でひと悶着がおき、周旋した新島も板ばさみにおいこまれた（同前Ⅳ二九〇、三三四頁）。

結局、広津の決断に任されたため彼は翌年三月に辞任を決行し、秋からの留学に備えた。新潟での任期は五カ月にも満たなかった。南国出身の彼には越後の冬は肉体的にも精神的にもことのほかこたえたはずである。

ところで、新潟に在任中、広津は新島から頼まれて新潟県の地図を大磯に送っている。伝道の第一線から撤退をよぎなくされた新島は大磯では「地図上ノ伝道者」たらざるをえなかった（同前Ⅳ二九〇頁）。正月早々に「新潟全県之地図」を受理した新島は、次の詩を贈って広津の好意を謝した（同前Ⅳ三四七、三五三、三五七頁）。

長江千里碧漫々　沃野饒田東北冠
地経一葉所君贈　展向南窓仔細看

ちなみに、今日残されているこの地図には県内のさまざまな地点に赤い丸が付されている。「夫レ伝道は尚戦争之如し」（同前Ⅳ三四九頁）とは新島の当時の信念であった。彼は戦場に臨む司令官よろしく、この地図を前に種々の作戦をくりひろげたに相違ない。広津はこの指揮官にあくまでも忠実な兵卒であった。

広津から新島に贈られた新潟県地図（同志社社史資料室所蔵）

新島の後継者

広津は慶応元年十一月十三日、福岡県柳川町の広津隆之助の三男として生まれた。不幸にも少年時代は肉親の愛に恵まれなかった。幼少時に生母と別れたのを始めとして、継母二人の手で養育されたうえ、八人の兄弟と父とは彼にさきだって逝ってしまうという有様であった。

このため、十分な教育が受けられなかったが、ようやく一八八一年になって自給自学の道を求めて単身、同志社英学校にのりこんだ。入学当初はキリスト教に対して反抗的であったが、しだいに心をやわらげるにいたった（「広津友信氏の永眠」、『人道』五五、以下「永眠」）。

家族の愛情に飢えた彼の心には新島や上級

生の暖かい指導が身にしみたのであろう。ついに一八八三年六月二十四日に第二公会（同志社教会）で新島から洗礼を受け、キリスト者となった（『全集』II五八一頁）。この新生を契機に新島は彼にとって「第二の父」となったはずである。

ふたりの間の距離は、広津たちの退学事件を通してさらに縮まったように思われる。一八八六年三月、外国人教師（D・C・グリーン）に反発した同級生八人と共に広津は同志社を去った。そして大阪で開校されたばかりの泰西学館の教師となった（『基督教新聞』一八八六・五・十三）。けれども翌年、新島の説得を受けて同志社に復学し、神学科に進んだ。聖書にある「放蕩息子」よろしく、広津は「襄の子」である喜びをさらに痛感したにちがいない。

新島もまた広津にはとくに目を掛けた。一致教会と組合教会との合併問題のさいには新島は広津を自己の代弁者とした。すなわち、一八八八年十一月、合併の件を協議するための組合教会総会が開かれたおり、病気のために出席できなかった新島は広津を花畠健起と共に同志社教会の代議員として参加させ、反対論を提起させた。ついで翌年五月の総会にも安部磯雄を代理にたてる一方で、またも広津と花畠とに自分の所信と気持とを伝えている（加藤延雄・久永省一『新島襄と同志社教会』九四頁）。

越後伝道に関しても事情は同じで、現地の窓口に選ばれたのは広津であった。新島は広津に対して越後の宣教師たちが抱く財政々策――詳しくは拙稿「アメリカン・ボードの日本伝道一八八三―一八九〇」、『同志社アメリカ研究』二四――の誤まりをつき、その変更を訴えている（『全集』IV二七一頁）。

新島晩年の周知の「畢生之目的」、すなわち「自由教育　自治教会　両者併行　国家万歳」を新島から最初に吐露されたのも、この広津であった（『全集』IV四七四―四七五頁）。

以上のような両者の交流ぶりから判るように広津こそ新島なきあとの将来の同志社を託すべき人物として新島自らが大なる期待を寄せていた人材であった。新島はそのことを遺言の中でもとくに力説した。

「米国ニ行き哲学とシステマチック神学を修め帰り来りて以て同志社神学部の為めニ全力を挙げ負担せられんことを切望す」（『同志社百年史』資料篇I七一一頁。以下『百年史』資I）。

同志社校長心得として

新潟を去った広津はかねての予定通り、一八九〇年九月三日に岸本能武太と共に渡米した（『基督教新聞』一八九〇・九・五）。

まずエール大学哲学・学芸学部の大学院（杉井六郎「イェールの日本人」七四頁、『同志社アメリカ研究』一三）で、ついでハーバード大学で研鑽をつんだ。

前者では新島の遺言にしたがって、「自由に自家の好む学科を撰び専ら哲学を修め追々宗教に関する学問の方に移り研究」を進める計画であった。最初の冬休みには新島ゆかりの地や人びと（ハーディ夫人も含まれていた）を訪ねた。「先生永逝せられて将に一週年期（ママ）に垂んとする今日（中略）身は一入追憶の情に堪へず候」（「在米広津氏の書簡」三九―四〇頁、『同志社文学会雑誌』四一）。

後者のハーバードではのちに見るように神学を修め、神学士の称号を得た。

八年におよぶ両校での研究を終えた広津はすでに三十四歳であった。一八九八年十月に

アメリカを発ち、ヨーロッパを経由して翌年三月下旬に帰国した。この間ロンドンではトインビーホールに一カ月半あまり滞在して社会事業について実地に研究を進めた。この地で迎えた二月二十三日には「独り静に故新島先生を追念」した（『留岡幸助著作集』Ⅴ二二五―二二六頁）。

帰国するや同志社の理事会は七月十六日に「広津友信氏ヲ招聘シテ教頭校長ノ職務ヲ托スル事」を決議した。ただし、「其名儀ハ追テ」定めることとした。「当分校長心得トスル」と決したのは二十日のことであった。さっそく広津は新校長としての抱負を開陳し、普通学部の充実と神学部の再興とを重点課題にあげた（「同志社理事会決議録」一一四、一二一―一二二頁、『同志社談叢』二）。

広津はいわゆる同志社綱領削除事件のために混乱期のさなかにあった母校の校運挽回のために投入された切り札であった。彼もまた師である新島の遺業回復のために与えられた重責を「全力を挙げ負担」する決意であった。

ところが、その決意も永続しなかった。わずか二年で辞任を申し出たからである。一九〇一年八月四日のことであった（『同志社年表』五三頁）。新島の後継者としての道は険しかった。

とはいえ、宣教師たちが同志社に対抗して開いていた神学校（福音学館）を同志社に吸収して同志社神学校を再開したことは、師の遺言をいくぶんなりとも実現したことになる。また、在職中は同志社教会の役員をつとめるかたわら、礼拝説教をしばしば担当した。同志社を会場に開かれた第十三回夏期学校で広津は歓迎のあいさつをしたが、校長心得としての最後の仕事ではなかったか（『新島襄と同志社教会』一六九、一七三、一八〇頁他）。

辞任の要因は、おそらく同志社綱領削除事件に端を発する学内紛争の余波と考えられる。時の同志社社長・西原清東は広津の辞任を「余が傷心に堪へざる」とうけとめ、「本社事務紛糾校務艱難の時に際し」広津が重責を担ってくれたことに感謝を表している。それだけに「校務漸く緒に就かんとする時に方り思う所ありて辞任」するのは「心外の至り」であった（『百年史』資Ⅰ八二七頁）。

辞任の遠因には清水泰次郎があらたに理事会に参画しようとしていたこともあったのではないか。清水は同志社の英語教師として広津校長とは「常に意見の衝突ばかりして居」た関係で「遂に追ひ出され」るにいたったという。抗争の原因は広津の「其やり方が総て非常に変てこ」であったから、と清水はいう（『創設期の同志社』一七〇頁）。

もっとも、清水自身も生涯、およそ二十校をわたり歩くという遍歴タイプの教師ではあった（詳しくは拙稿「清水泰次郎について」、『英学史研究』二〇）。

同志社以後の広津友信

同志社を去った広津は一九〇一年九月から岡山の第六高等学校の英語教師に転じた。四カ月前（五月）に結婚したばかりの新婦といっしょであった。彼女は旧姓・甘糟初子といい、新島未亡人（八重）の養女であった（「永眠」）。つまり二人の結婚は「襄の子」と「八重の娘」との奇しき巡り合わせであった。

かくして広津は戸籍のうえでも「襄の子」となったわけである。

さて、各年度版の『第六高等学校一覧』によれば最初の一年は講師で、二年目に教授に昇格。年度により生徒監を兼ねることもあった。学位はハーバード大学バチェラー・オブ・

ディヴィニティ（神学士）である。

岡山時代、広津は求められて新島の回想文を『基督教世界』（一九一三・七・一〇）に寄せた。

「『一片の精神、一滴の感涙』此の句は新嶋先生起稿中にあり。同志社設立の由来を述べられ、特に自ら圏点を附せられたるものなるが、豈に先生の事業の如何なるものなるやを説明せられたるのみならず、先生の如何なる人物なるやを自画自讃せられたるものの如く、精神の人熱涙の人『救人而不能救己自』の偉人眼前に現はれ痛く心を動かされ申候」

「一片の精神、一滴の感涙」は正確には「一片ノ精神ト感激ノ涙」で「同志社大学設立旨趣」の中で三度も使われている（『百年史』資

第六高等学校時代の広津友信（本井康博編『写真で見る新潟教会の歩み』1986年）

I一七七頁）。

なお、岡山での教会活動についていえば、広津は岡山組合教会に属して（『大正三年日本基督教徒名鑑』七四七頁）、時に伝道を手伝うことがあった。

一九二〇年、岡山から新設の山形高等学校に転じた。六高の同僚（三輪田輪三）が初代校長となったために開校事務に協力したのであろう（『職員録』大蔵省印刷局、一九一九年版四四〇頁、一九二〇年版四三二頁）。『山形高等学校一覧』（各年度版）にしたがえば、身分は教授（英語）で生徒監や評議員を兼ねたこともある。学位はS・T・B（ハーバード大学）である。

同志社時代の旧友、留岡幸助（家庭学校々長）が来形して一泊したり（『留岡幸助日記』V一四三頁、以下『日記』）、古巣の新潟組合教会の礼拝に顔を出すこともあった（『新潟教会月報』七七）。

一九二五年には山形を去って上京した。前年に長男（帝国大学生）――六月に慶応病院で死去（『日記』V一一七―一一八頁）。名前（襄次）は新島にちなんだのであろう――と次男（第三高等学校生）とをあいついでなくしたことや健康がすぐれなかったことから還暦を機に勇退したのである（「永眠」）。

それより三年後の一九二八年二月九日、留岡幸助は有馬四郎助、山本徳尚（広津の旧友でもある）と協議のうえ家庭学校に「顧問として」広津を招くことを決めた。歓迎会が開かれたのは四月二日、同校の礼拝堂においてであった（『日記』V四七四、四八四頁）。

四月から「幹事」という肩書で校務や礼拝説教――ある時の題は「新島先生」――などを担当している（同前五五七頁）。もと学友の柏木義円が家庭学校を訪ね、広津宅に一泊した時（一九二九年十一月九日）には、広津はキャンパス内に住みこんでいた（『上毛教界月報』三八五）。

新島八重と広津友信の死

広津の家は義母の新島八重が上京したさいにも常宿であったようである（『日記』V四〇四、五二八、五九八頁）。

その八重が一九三一年に京都で発病するや「広津友信御一家其他の親戚諸氏と協力して」看護に遺漏なきを期した。すなわち、十月には養女であった広津初子が入洛して半月あま

り看病にあたったのに続けて、広津自身も十二月十日から一週間、義母を見舞った。彼の胸中には新島襄の臨終のさまがあれこれ去来しなかったであろうか。

八重の葬儀には広津は妻や子（旭）――宝塚で園芸業を営む――と共に参列し、最後に「親戚代表」のあいさつをのべた（『同志社校友同窓会報』六六）。「襄の子」としての最後の務めであった。ちなみに八重の形見わけにあたったのは広津旭であった（『山室軍平選集』X一六五頁）。

一九三二年、家庭学校幹事を辞し、大森区雪ケ谷に閑居する身となった（「永眠」）。そして五年後（一九三七年）の十一月二十九日に召天。奇しくも同志社の創立記念日であった。

遺族は『東京朝日』と『大阪毎日』（いずれも十二月四日）とに死亡広告を出した（キリスト教系の新聞には見当らない）。

父広津友信　十一月上旬ヨリ違和ノ処十一月廿九日午前二時卅分尿毒症デ永眠致シマシタ　遺志ニヨリ十二月二日近親相集マリ自宅デ葬儀ヲ済マセ多摩墓地ニ埋葬致シマシタ　慈ニ生前ノ御厚誼ヲ深謝シ是レヲ以テ御通知ニ代ヘマス

東京市大森区雪ケ谷一二九五
妻　初子
男　旭

昭和十二年十二月三日

家庭学校の機関紙、『人道』（五五）はさっそく紙面をさいて追悼記事を掲げた。それによれば、葬儀は同志社の後輩でもある牧野虎次（家庭学校々長）と山室軍平（日本救世軍司令官）とが司式と式辞（告別説教）とをそれぞれ担当している。桐ケ谷で火葬後、ただちに納骨されている（「永眠」）。

広津の遺志に基づき告別説教を担当した山室は、「救世軍の最も理解ある軍友」であった広津の死をさっそく『ときのこゑ』（同年十二月十五日）で悼んでいる。

同志社関係の刊行物では『同志社新報』（同年十二月十五日）がさきの新聞広告をほとんどひき写すような形で彼の死を簡単に報じたのについで、『同志社同窓会会報』六五（同月十八日）が彼の永眠日だけを伝えたにすぎない。

たまたま同日に召天した水崎基一（浅野綜合中学校長）と比較してもその差はあまりにも大きい。水崎の場合、告別式には同志社から総長や校友会長の弔辞がおくられたのを始め、ただちに『同志社新報』が記念ページを設けたり、記念碑建設運動が始められたりしている。

校友会に限っても広津は設立時の主要委員のひとりでもあり（『同志社校友会百年のしおり』二四―二五頁）、けっして縁がうすい方ではなかった。

ことほどさように広津の後半生は同志社とは無縁の世界であった。彼は新島の後継者として同志社の主流を歩むはずであったが、わずか二年で挫折した。その後、地方にあって英語教師を永年勤めたあと、ひそやかにその一生を閉じた。

（同志社大学人文科学研究所協力研究員）

新島襄　畢生の想念

――横田安止への書簡より――

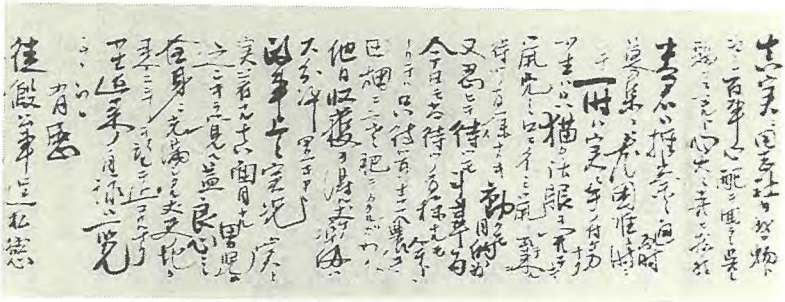
土肥昭夫

この特集号で編集者が筆者に依頼されたことは、新島襄が人生の旅路の終わりを迎えた二か月間何を考えていたかを、横田安止（やすただ）への書簡より述べること、特にこの中にある「自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳」の意義を明らかにしてほしいということであった。以下その要望に添って叙述を進める。参考文献は『新島襄全集』（同朋舎、既刊七巻、未刊三巻）である。

まず、新島の足跡をたどる。一八八八年一一月に『同志社大学設立の旨意』を公表した新島は、翌年一〇月一二日その募金のため、病身をかえりみず、東京に赴いた。彼はそこで政財界人の間を往来した。しかし、条約改正問題で外相大隈重信の負傷、黒田内閣の辞職、内大臣三条実美の首相兼任といった政情不安定のため、募金活動は円滑に進まなかった。横田への第一信（10・25）、第二信（11・23）はこの時期に書かれた。一一月二五日に彼は上州前橋に赴いた。そこで激しい胃腸の痛みに襲われ、静養を促された。彼のために準備された集まりにも彼は出席することができなかった。しかし、事態の静観は許されない。健康の「回復ノ見込ナキ」（全集5、三九九頁）ことを承知で彼は一二月一三日東京に帰り、運動を続け、大学設立について社員会を開いた。この頃の日記や書簡をみると、彼は組合教会の伝道にも強い関心を寄せている。彼は埼玉、群馬、栃木、新潟、長野、福島各地の人口や産業の動態を調べ、そこに組合教会の拡大を図るため、組合教会牧師や同志社関係者に書簡を送っている。

しかし、東京の冬は彼にはきびしかった。一二月二七日に彼は、徳富蘇峰の勧めにしたがって、大磯に転地した。横田への第三信（12・30）、第四信（90・1・16）は大磯で記されたものである。彼は新しい年を迎え、さらに日本伝道の構想を立て、関係牧師にその意向を伝えた。しかし一月一一日腸カタル、さらに腹膜炎を起こした。二一日に自己の臨終のときを知った彼は、八重夫人、小崎弘道、徳富蘇峰の立ち合いのもとで遺言を述べた。それは同志社に関すること、自らの非礼のこと、さらに大学設立に協力した人たち、友人、牧師、学生たちへのことばであった。そのひとりに横田がいた。「天ヲ怨ミス人ヲ咎めす」（全集4、四〇九頁）彼は永遠の眠りについた。一八九〇年一月二三日のことである。

横田安止への書簡の分析に入ろう。それに先立ち、横田のことを述べる。全集4の注解



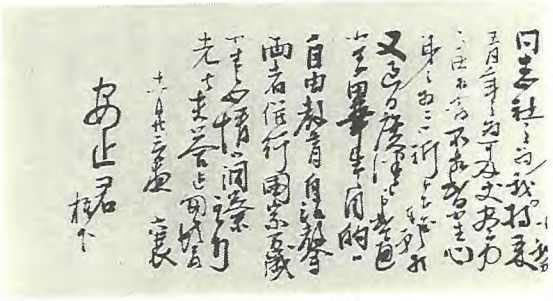
1889年11月23日横田安止への書簡抄（『新島襄全集』4,245頁）

によれば、彼は一八六五年熊本に生まれ、大学予備門・成立学舎で洋学を学んだが、八五年九月に同志社英学校に入学、九〇年六月にここを卒業した、という(四六六頁)。すると、横田が新島より書簡をうけとったのは、最終の五年生のときであり、年齢も二四歳ということになる。第三、第四信より明らかなように、彼は同志社教会員であった。新島は彼を「誠ニたのもしき若者」(全集4、二六七頁)とみ、自分の留守中寂しがっている八重を尋ねるように彼に依頼している(第二信)。彼も節度ある新島の姿勢に感動し、尊敬の念を抱いていた(『創設期の同志社—卒業生たちの回想録—』一九八六、九四—九五頁)。

さて、横田への新島書簡四通を読むと、同志社教育、組合教会の伝道、そしてそれらに関わっていく新島の姿勢が明らかになる。それらはおのずから「自由教育、自治教会、……」につながっていくだろう。

まず、新島の姿勢から述べる。彼が東京で募金活動に入ったとき、政情不安定のため、運動は円滑に進まなかった。だからといって後退することは出来ない。「大風怒濤ニ向ヒ抗進スルノ覚悟ニ有之、……単身独行天下之人士ニ訴ルノ策ヲ立居候間、天父ニ向ヒ吾人ヲ助ケ賜ヘト御祈禱被下度候」(第一信)という。さらに病気という悪条件が重なってきたが「已ニ乗出シ船如何ナル風波襲ヒ来ルモ再ヒ帰港ス可ラス、大風モ可□吹、怒濤可起、只小生ハ彼岸ニ達スル事ヲ知ルノミ、半途ニシテ沈没スルモ小生ノ恐ル、所ニアラス」(第二信)と不退転の決意を表明する。さらに、大磯では、ひとまず帰京して学生諸君と交わり、将来の計画も立てたいが、病気のため身動きができない。しかし「小生病魔之一囚人たるも心ノミハ我主基督之一小信徒、自由之忠僕ニ有之」(第三信)という。そして、死を多少予期した第四信では「未タ金ハ出来す、小生ハ如此屢病ニかゝれり、世人落胆して余豈落胆せさらんや、然れ共余は元気を繋なき、決し而落胆せしめす、又死に至るも後悔せしめず、病床に在り尚泰然として進取之計画を爲して止まさらしむる者ハ、一ハ活ケル天父ノ皇天に在すあり、一ハ愛する生徒の同志社ニ在るあり、余ハ幸ニ此ノ二ツノモーティヴ(ポワル power を胸中ニ抱ける如何ぞ、些少之事実之爲ニ軽々ニ撓屈すへ〔け〕ん也」とその心情を披歴するのである。

ここにみるものは、同志社大学設立という目標に向かってまっしぐらに進もうとする情念であり、如何なる障害をも克服して初志を貫徹しようとする決意である。これを支えたものは、神の摂理（プロビデンス）を信じ、これに生きるという彼の信仰である。彼はこの信仰理解を一九世紀ニューイングランドのキリスト教より体



新島襄全集、4,246頁

得していた。このキリスト教は一七世紀のアメリカ・ピューリタニズムを精神的源泉とする。それによれば、神の前には罪人でしかなかった人間が、キリストにある神の救いの確かさを確信し、その恩恵の契約にあずかったものとして、神の意志を実行する、つまり業の契約に生きるという義務を負う。神はそれを実行する力を与える、というのである。ニューイングランドの人たちは、このような神のはからい、つまり摂理を確信して新たな市民社会、つまり契約に生きる共同体を建設していった。しかし、ニューイングランドも、啓蒙思想や功利主義のために、旧い秩序となっていった。そこで彼らは拡大していく西部、さらに海外に向けて宗教活動を展開していった。大覚醒運動がその引き金となった。彼らは、神の契約に生きる選民として、神の支配に参与するという使命感に生き、あらゆる困難にたち向かったのである。新島はこのようなキリスト教を心に刻みつけていた。彼はキリスト教に入信して神の恩恵の契約に生きた。そして、日本を近代市民国家にするためには、それをつくり出す人間が必要である。そういう人間は自由自治を基本とするキリスト教的良心（価値観）に生き、高度な近代学問を駆使するものでなければならない。同志社大学はまさしくそういう人間教育を目指す。したがって、その設立は神の意志であり、その実現に向かって進むことが、神への義務である。新島はこう確信したのである。第三信の「我主基督之一小信徒、自由之忠僕」というのも、この意味に解される。

もっとも、このように述べると、彼はアメリカナイズ、少くともアメリカ・キリスト教ナイズされてしまった人間にみられるかも知れない。たしかに、彼の見解にはそういうところがみられる。しかし、彼の想念（マインド）は、それでは説明がつかない。アメリカ人の場合、あのフロンティア精神にみられるように、粗野でたくましい生活力、自由であるが故に快活で潤沢な生活感覚がある。そこからみると、少くもこの当時の新島の姿には、あまりにも悲愴という、日本人の美意識がにじみでている。それを裏がきするものは、一八九〇年の新春につくった彼の和歌である。「石かねも透れかしとてひとすしに　射る矢にこむるますら雄の意地」（全集5、四〇八頁）。ここでは、キリスト者としての使命感、義務感と武士の

意地とか誇りとかが、相互に共鳴し、支え合っている。この関係を的確に探り出さないと、新島の想念はとらえられないだろう。

横田への書簡から同志社教育に関する新島の提言をみよう。当時同志社は男女学生・生徒九百名であった。そこで彼は言う。その人数が多くなると、画一的に規則で彼らを拘束してしまい、機械的な管理教育に流れていく。それは自然の勢いかも知れないが、そうあってはならない。深山大沢のように、小魚も大魚もそれぞれの個性を再発見し、これを伸張させていくことが必要である。そうすれば、彼らは必ず有為の人間となる。そのためには、教師と学生・生徒の率直で誠実な交流が大切である、という(第三信)。彼は無規則主義などを唱えたのではない。草創期の同志社は学則、校則を持っていた。彼にとって重要なことは、規則によって個性や良心が生かされず、おしつぶされてしまうことであった。自由と規律は人間教育に不可欠であり、そのような仕方で育成された人間が社会の健全な発展に貢献し得る、と彼は考えていた。

横田は同志社を憂い、その現状を多少きびしく批判する書簡を大磯にいる新島に送った、と思われる。第四信はその返信である。彼は、その中で、同志社には小細工をろうするものがいる(遺言からすれば、金森通倫のことであろう)、雄大な志と生命力に乏しく、ヌラヌラとした骨なしのナマコのようなものがいる、と述べている。教師や学生・生徒にそんなものがいては、自由教育はできない、というのであろう。それだけであれば、この書簡は陳腐なものに終わる。彼はさらにそういう人間の自己変革の方法をさし示している。それは神の摂理、またキリスト(その再発見を含む)による人間変革の途であり、彼自身がその証人であることを大胆に語っているのである。

最後に、新島は条約改正問題で及び腰となり、権謀術策をろうして低迷する日本の政治界の現状にきびしい眼を向けたのであろうか、第二信で次のように述べる。「政事上之実況ハ実ニ実着ナル真面目ナル男児ノ乏シキヲ覚ヘ、益良心之全身ニ充満シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ望テ止マサルナリ」(傍点―筆者)。今出川、田辺の両校地正門脇に建てられた石碑のことばは、傍点部分の引用である。この石碑が校門にあるから「良心の充満した人物よ、来たれ」という招きのことばと解するならば、同志社教育の存在余地がなくなる。また、これを「良心的で生真面目人間よ、起こり来たれ」ととるならば、第二信の意味をとりちがえることになる。その真意は、今日の政治、社会の状況は、良心の全身に充満した丈夫の出現を待望している、この丈夫を同志社教育は生み出し、世に送る、ということであろう。では良心の全身に充満した丈夫とはどういう人間か。第一信で新島が語る次の文章が、その答えであろう。「何卒書生之修学中ハ勉強に汲々タルヲ以テ他事ニ関スル能ハスト雖、常ニ眼ヲ開キテ天下之真想ヲ監察シ、志ヲ励マシ、鋭ヲ養ナイ、胆力ヲ練リ、勇気ヲ蓄ヘ、他日雄飛スルノ策ナカルベカラス、我カ同志社ヲ以テ将来小玩器之製造場トナラサル様、……是レ小生之日夜我カ邦家之爲ニ祈リテ止マサル所ナリ」。ここにはキリスト教的な正義観や闊達な創造精神がみられないわけではないが、むしろ天下国家を論じ、経世済民の途をきりひらこうとする士族的指導者意識が前面にあらわれている。新島はこの意識に支えられて「自由教育、自治教会、両者

併行、国家万歳」と唱えた、と思われる。こゝに士族出身の「明治人」であった新島の限界を知るのである、われわれが新島の遺産として掘り起こすべきものは、他の面でこのような士族的指導者意識からも解放された平等精神を生きた彼の生きざまであろう。

紙数をかなり超えているので、自治教会のことは、簡単に述べる。横田は同志社教会員であったが、神学校の学生でも、将来伝道者となる人でもなかった。新島は彼に組合教会の伝道のことについては、あまり述べていないが、それでも第三信、第四信にこれについて言及する。そこで、彼は組合教会のことを「自由主義」の教会といい（第三信）、その伝道を「自由ノ活種ヲ播ク」こととする。この自由主義というのは、一九世紀の近代神学の一潮流として、合理主義、歴史主義に立つ神学的立場ではない。その語からそのように取り違える人びとがあちこちにあるので、あえて説明しておこう。彼はニューイングランドの、保守的でないまでも正統的福音主義の流れを汲む人であった。彼の自由主義というのは、教会政治上の概念であり、具体的には会衆主義のことである。それは神の契約に生き、キリストにつながる個々の信仰者、その直接的な交わりとしての各個教会の主権を認め、その相互の交わりと連帯としていわゆる全体教会をとらえるという立場である。それは国教会、領邦教会などとは質を異にするのみならず、メソジストの監督制、改革派・長老派の長老制に対しても各個教会の自由を唱えて、政治を行なうのである。この自由は自治なしには確保できない。新島が自治教会と唱えた所以である。日本でこの米国会衆派との関係で生まれて来たのは、日本組合教会であるが、その故にこそ米国会衆派とは一応独立した教派として存在していた。

組合教会が結成された一八八六年四月より少し前に、この教会は長老制をとる日本基督一致教会と合同運動を始めた。組合教会の多くの指導者たちは日本教化のための大同団結を唱え、教派的いき方を派閥的なものとして斥け、この運動に積極的であった。しかし、新島は会衆主義の自由、自治、その直接民主主義の精神が長老制の管理主義、間接的民主主義の政治によって失われることを憂慮し、その合同教会規則草案に反対していった（全集2、3、4の関係個所を参照）。彼の強引な説得活動と組合教会の人たちの幸か不幸か、曖昧な教派意識が、この運動を中止に追い込んだ。新島が横田に書簡を送った頃は、すでにこの運動は暗礁に乗りあげていた（組合教会の教会観については拙著『日本プロテスタント・キリスト教史論』教文館、一九八七、合同運動や新島の立場については拙著『日本プロテスタント教会の成立と展開』教団出版局、一九七五所収の関係論文を参照のこと）。新島は今こそ一致教会に対抗して、自由主義の教会を各地に設立していきたい、と考えた。自由教育をうけた神学校の卒業生であれば、自治教会を建設していくことができる。この教会の教化活動は、日本に自由と自治の社会をつくり出す、いわば社会教育である。そうである以上、「自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳」ということになる。新島はこのような確信のもとに、日本地図をひろげ、組合教会の伝道戦略を立てていったのである。

新島の死後、同志社が自由教育を、組合教会が自治教会を、彼の真意に即して、実現していったかどうか――は、また別の問題である。

（大学神学部教授）

原忠美宛書簡

―一八九〇（明治二三）年一月十一日及び一月十七日―

原　忠和

新島襄の最後の二カ月の書簡の中で、伝道に従事しているものに宛てたものは、関東・仙台・越後地方に限るが、ことに越後の諸氏に宛てたものは十一通（広津友信宛七通、時岡恵吉宛二通、原忠美宛二通）にのぼっている。これは一八八九（明治二二）年末、新潟教会広津友信が新潟全県の地図を新島宛におくり、新島はその地図によって「鋭を養った」ことによるのであろうが、果してそれだけであったであろうか。そのことを原忠美宛の二通の書簡から探ってみたい。

原忠美は、一八六五（慶応元）年岡山に生れ、金森通倫、ペティ宣教師の勧めで、一八八〇（明治一三）年同志社英語普通科に入学、在学中一八八二年二月五日、新原俊秀、岡本（安部）磯雄、瀧（岸本）能武太、山中百、澤山雄之助（保羅の弟）、山田安路と共に新島より受洗した。一八八五年同科を卒業、同時に英語本科神学科に入学、一八八八（明治二一）年六月卒業、同年八月七日伊香保に新島を訪ねたのち、新発田に赴任した。新発田は伝道開始後日浅く（新発田教会創立　明治二一年五月二九日）、二、三の信徒が集って一つの講義所を組織していたにすぎなかった。原は、中江汪、村田平三郎のあとをうけて、新発田の伝道に当ったが、困難な状況であったことは、当時同地の英語夜学校を手伝った三輪源造の言を待つまでもない。（原忠美「神人合一」第三版昭和三年によせた三輪源造『思ひで』）

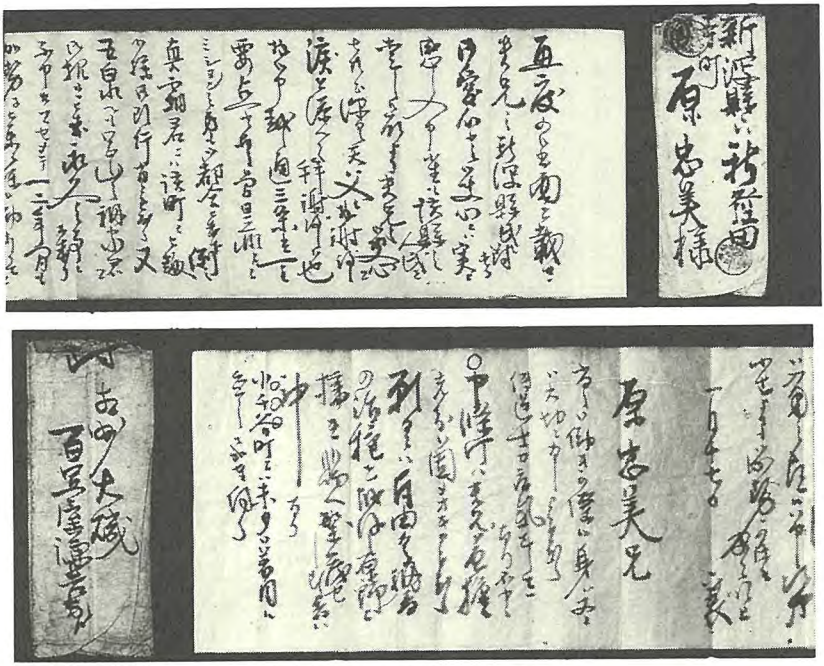
新島は原忠美のことを気にかけ、新発田赴任と相前後して広津友信に紹介状を書き、又後には、「原兄ニハ決シテ失望落胆セサル様」勧めることを、広津友信に頼んでいる（明治二三年一月七日広津友信宛）。これは、同志社卒業の弟子に対してなした心づかいの一例であると共に、新島の晩年の関心であった越後伝道にたずさわる者への心づかいであったと思われる。

一八九〇（明治二三）年一月十一日の書簡は、個人的勧告に始まっている。

貴君ニハ非常なる御奮発を以て新発田伝道ニ御負担被成候よし、小生ニ於而は感泣天父に謝するのみ

と書き出し、クリスマスの進物に、ジョン・ブライトのスピーチ一冊を送ると追伸で結んでいる。二三歳独身で未知の地新発田に赴き、悪罵嘲笑の中で説教をしなければならなかった原にとって、これはどんな励ましであったか想像に難くない。

しかし、そうした個人的関係を超えて、もっと遠大な思いを、新島はこの書簡に託している。時あたかも第一回衆議院選挙、国会開



原忠美宛書簡 1890(明治 23)年 1 月 17 日

会の年であった。

此廿三年ハ千歳（載）之一遇政事上之大進歩も可有之年ならば、希クハ我カ伝道上ニも一大進歩之現象を呈出セしめ度候間…

この「伝道上の大進歩」とは、越後地方の新発田をはじめ、中条、村松、五泉などに、自由自治主義の組合教会の確乎とした手がかりをつくり、「先進者之特権」をきずくことであった。その背景には、一致教会（のちの日本基督教会）と組合教会の合併の中止という事態がある。

（後述）

近頃聞ク所ニよれハ、一致会ニハ合併論も殆ト中止破裂之体ニ至リ候故、是よりハ一層奮発我カ組合会ニ伝道上競争を試ミらるるならんと窃ニ聞及……

縦令一致会之伝道者彼地方ニ入込ミ漸々我党之兄弟ヲ蚕食セントスルノ日ノ来ラサル先キニ、彼ノ信者連中ニハ此ノ自由自治主義ナル組合会之申合書ヲ渡シオキ、固ク約束シテ之ヲ遵奉セシムル様ニナシオクハ甚必要ナリ

この書簡の中に、「蚕食」という語が三回もつかわれているのは、一致教会の進出に対して、組合教会が早く手を打つべきことを説いているのである。

本年六月前ニ新発田ヲ初メ中条、村松、五泉辺ニ確乎トシタル組合会之手カヽリヲ作り、自由自治主義ノ教会之分子ヲ播クハ一日モ猶余スベカラサル事ト存候

それは、六月には明治学院から二十名の邦語卒業生があり、越後あたりに伝道を着手する計画を、新島が聞き及んでいたからであっ

た。自由自治主義の組合教会の進展を期すために、資金も申越し次第送ろう、同志社から加勢も送ろうというのである。

この書簡の直後、原から新島に書簡がおくられたが、その返書が一月十七日の原宛書簡である。原は一月十一日の書簡に応えるべく新潟伝道の決意をしたことに対し、新島は、

貴兄之新潟県民ニ対する御愛心と御決心ニハ実ニ感し入申、小生も該県之人民を愛し候所より貴兄之御決心を喜ひ、深く天父ニ拝謝致し涙を添へて拝謝致し候也

と新潟伝道への熱意と原への期待を云い表わしている。そして原からの書簡の中で原が提案したのであろうことに賛意を表し、一層の励ましを与えている。

真霜君ニハ該町（註　三条）ニ被趣候様御断行有之度候、又五泉へも岡山之福家君を御招き被成、永久之事ニ相成リ不申候ハ、セメテ一二年間も加勢に被参候様御勧ありて……一日も早く援兵を御招き被成候方可然ト奉存候

と越後伝道の緊急なるを説いている。それは「他日種々之人物カ入来り鹿ハ誰の手ニ落るかも知れさる程の惨状を呈するニ至らん」からと云うのである。この手紙の中でも「蹂躙」「惨状」「侵入」という言葉が目立つ。

そして、柏崎伝道にも手後れにならぬよう着手することをすゝめ、追伸には、小千谷町伝道には未だ着目していないがどうなのかと新島の新潟伝道へのなみなみならぬ熱意をあらわしている。それは「天の吾人ニ新潟全県下伝道之大責任を与へ賜ふたるなり」という責任感の故であった。だから「願くハ自由なる福音の活種を越後之原野ニ播き賜へ、繁茂セしむる者ハ神なり」という祈りで結んでいるのである。

こうしてみると、越後地方の伝道の推進は、一致教会との教派間の確執のためとも聞こえるが、果して新島の志は、そのような狭い教派主義の故であったのであろうか。

一致教会と組合教会の合併については、一致教会の働きかけに応じて、一八八六（明治一九）年から四年間にわたって、互いに委員をあげて、憲法の草案をつくるまでに至っていた。一八八九年五月神戸で開かれた組合教会総会は、その草案に大巾修正を加えたが、一致教会大会では、草案についての従来の考えをゆずらず、結局中止の止むなきに至ったのである。この合併問題に新島が反対したことは広く知られている。その理由の一つに、新島がアメリカン・ボードの宣教師であったことが挙げられているが、果してそうした自己保身の故に反対したのであろうか。

合併論のことについては、新島襄全集第二巻に詳しいが、新島は一貫して自由自治主義を犠牲にして合併することに反対しているのである。それは新島が、自由の精神こそ「一国の良心」として国を樹てる礎と信じていたが故であった。

新島の畢生の目的は「自由教育　自治教会両者併行　国家万歳」であったことはよく知られている。だからこそ国家の礎となるべき自由教育の大学設立と共に、自由自治の教会の進展を望んだのであった。この「両者併行」は、一月十一日の書簡にもあらわされている。

又越後地方ニ福音之種ヲマキ置カハ将来同志社ニ大学科ヲオキ之ヲ維持スル等ハ越後之合力を以テ実ニ容易ト存候間……

新島はあくまでも各個教会の自由自治が、合併によって干渉され規則によって束縛されるのをおそれたのであった。新島によれば、この自由自治共和平等主義こそ十九世紀に発

達したもので「近世の大発見」、これは「古来の遺物」である中央集権貴族主義、寡人政治よりすぐれたものであると、政治体制と比べつつ、教会のあり方を考えていたのであった。そして日本は貴族的主義の傾向があるからこそ一層自由自治を唱えるべきことを主張したのである（新島襄全集第二巻四九九頁）。

しかしこの自由自治が、教会の中では未だ幼稚であり、その芽を発育せしむることが必要（同五二三頁）と時期尚早故の延期を主張した。それなのに委員の専越、外国教師の誘導によって、各個教会の意志を尊重せず合併が推進されつゝあるところに、自由自治の危機を見たのであった（同五〇六―五〇八頁）。このことは、新島が憲法草案に自ら添削している内容から見ても明らかである（同五三六―五五六頁）。新島はあくまでも各教会の自治自由を主眼において、それを妨げるおそれのあるところに異を唱えた。従って新島の反対は、狭隘な教派主義によるものというより、自由教会・自治教会、そして国家の礎たる「一国の良心」の主張の故に反対したとみることができる。

新島は、「関西の諸教会ハ今ノ組織デスラ已ニ貴族的教会ノ形ヲナシタレハ」（同五三一頁）、合併延期の論をおこすことを関東諸教会に期待した。上毛の諸教会に延期のための委員を選んで専任の権を与えることを望み（同五三二頁）、関東諸教会が委員の不条理を唱え、聞き入れられない時は関東諸教会の委員とは見なさないことを公言することを期待し（同五三〇頁）、関西諸教会が委員の主張に賛成して延期に反対するならば、関西諸教会が牧師まかせで各員の責任を果していないことを責めるようにと関東諸教会に求めている（同）。

新島は、この自由自治教会の充実と進展を、越後諸教会にも望んだのではないか。これが、合併論中止の時期に、関東、仙台、ことに越後に書簡を多く書きおくった理由ということができないであろうか。だからこそ、越後を拠点にして、越中、石川、東北地方までも自由自治教会の伝道の推進を望んだのであった（一月十一日書簡）。

原忠美は、こうした新島の遠大な計画の書簡をうけとった。もともと原は新島に心酔していた。「先生は至誠国を思ふ愛国の士なり。此の先生の下に学生たるの栄誉を得たるは予の幸福なり。先生の相貌を憶ふだに今尚ほ涙の袖を濡ほすあるを覚ゆ」（遺稿「基督の面影」）と書いているほどであるが、生来「華奢な身で、色白で上品な人物」（三輪源造）で、自ら「性質創業より守成の方」（「基督の面影」）であることを自認していた故、充分新島の期待にこたえることはできなかった。一八九〇年から九二年にかけて新発田では伝道は進展したが、出張伝道は佐々木村に限られており、一八九三（明治二六）年以降教勢が減じている（『北越新発田基督講義所日誌』）。そしてついに一八九五年原は温暖な明石へと転じてゆくのである。時岡恵吉も広津友信も一八九〇年に越後を辞している。又五泉も一八八九（明治二二）年八月坂田忠五郎によって講義所が設立されているが、福家が赴任したという記録はない。新島の最後の願いは越後でそのままでは実現しなかったと云うことができる。

（一九五六（昭和三十一）年大学神学部卒業一九五八（昭和三十三）年大学院神学研究科修士課程修了・日本基督教団南大阪教会牧師）

長岡伝道　時岡恵吉宛書簡

西八條敬洪

長岡教会二代目牧師時岡恵吉宛への新島襄の手紙が二通残っている。一通は新島襄が危篤のなかで新潟にて伝道に従事する牧師を励ました二通のうちの一通である。残り一通は新発田教会牧師原忠美に宛てられたものである。その二通は絶筆の書簡として広く知れわたっている。その手紙の日付は一八九〇年（明治二三年）一月一七日。新島在神奈川県大磯百足屋謙吉方より時岡在新潟県長岡町阪ノ上町五一番戸に宛てられた。もう一通は一八八九年（明治二二年）十二月一四日に新島在東京京橋元数寄屋町三丁目成瀬方から長岡町大字観光院町五十嵐方に宛てられた。それには「小生の心は新潟縣下の為に燃へて止まず、焔々の火は恰も浅間嶽上の烟の如し」と新潟伝道への情熱があふれ出ている。しかし、新島自身は生前一度も新潟に脚を踏み入れたことはなかった。それなのに書簡では「長岡の為に計るに該地は実に新潟縣中屈指の良田なれば」と記している。又、「小生ハ元来長岡ニ対し大なる希望を抱き居る者なり」と長岡の地に期待を寄せている。約百年前の新島の絶筆の書簡に、新島の肉声が聞えてくる。そこには気骨ある豪胆家を愛する古武士の風格が出ている。「此戦場に向ひ充分の勇気を振ひ、主の名の為に決戦し玉へ」と新島は述べている。

時岡恵吉の名は日本プロテスタント史にかろうじて残っているとするなら、新島から絶筆の書簡を受けとったことである。時岡恵吉は岡山県の出身で、岡山組会教会で信仰を養われた。一八八六年、同教会から奨学生として同志社へ行った。（福音新報一八九〇年一二・二六）同志社に残された学生名簿（一八八九年一月）には「岡山県備前国邑久郡牛窓村平民　別科神学三年生」（同志社百年史資料篇一、六八〇頁）と記されている。時岡は一八八八年十一月に同志社での勉学を中座したまま長岡に転じ、そのまま同志社には戻らなかった。（本井康博「明治期長岡の社会と文化――キリスト教を通してみた」より）

現在、時岡が新島に宛てた書簡の書き写しが八通残っている。

第一信一八八九年（明治二二年）十一月四日
時岡在長岡大字観光院町五十嵐屋内　新島在東京京橋区山城町山城軒

第二信十一月二六日時岡在長岡町大字阪の上五十一番地　新島在群馬縣前橋神明町関農夫雄方

第三信十一月二七日

第四信十一月二八日

第五信十二月九日

第六信十二月一七日新島在東京京橋区南鍛治町茂林館方
第七信十二月二三日
第八信一八九〇年（明治二三年）一月二日神奈川縣大磯町百足屋方

時岡の書簡には、終始愛を説き、その熱情が出ている。又、「必ず愛を実行致し」とある。しかし、書簡には当時の長岡教会の実状が記されている。「残るもの三〇有余名」「四分五裂」「某党派、農学生派、青年派、〇〇派」と多くの派閥に分れていることが明瞭にわかる。

時岡が長岡に来る一年前、長岡教会は教会設立を行うが、教会紛争や宣教師をめぐる事件、伝道師の交代、集会場の変更などがおこった。そういう状況を新潟新聞一八八九年（明治二二年十二月八日）は次のように記している。

「長岡基督教会、同会は昨年会員中に於て紛争を生じたる以来は殆んど休会の如き有様なりしが今般新人役員も来岡せられたれば稍や従前の面目を一新し船江座に於ける去る五日の演説を第一着手としてじらい当地に於て活発なる運動を始むことに決したりと云ふ」

「会員中に於て紛争」とは土屋哲三除名問題をいうのではないだろうか。

長岡教会は自給教会でなく日本伝道会社より援助を受けていた。日本伝道会社が一八八八年に支援を開始し、時岡の給与を同社が負担している。書簡には「伝道会社より一向御送金を怠り候」「小生非常の貧生にて負債もあり」「小生が社会に対し不信用を取る原因なり」と困窮を訴えている。ニューエルの筆になると思われる北日本ミッション「第七年次報告（一八九〇）には時岡在任のことが記されている。「この〔長岡〕教会は数カ月間、伝道師不在であったが、（一八八九年）十一月に時岡氏を迎えた。彼は教会員たちを奮起させて、霊的な生活を送らせ、どちらかというとまとまりのなかった会員たちをひとつにするのに大いに貢献してくれた。当地で二、三カ月働いたが、いくつかの不幸な事情のためにその働きを断念せざるをえなくなった。」（訳・本井康博）

時岡は長岡教会を独立自給教会にしたいとの希望をもっていたが、それを果たすことが出来ず、たった二カ月で長岡を去る。

時岡の書簡には仏教の勢力が盛んであること、大道長安による救世教の影響の大きいことを記している。仏教、救世教の勢力範囲が大きい中にあって、時岡は年賀のあいさつかたがた会堂建築の計画について新島に報告している。それに応えて、新島は次のような書簡を時岡に送っている。

「却説御地之伝道模様ハ益よろしく兄弟方ニハ大奮発被成、已ニ会堂建設之御計画も初まり候よし大慶之至に奉存候、苟も基督之信徒たる者ハ己自身を清く神之御手ニ捧け、我カ心を以て神の永住し賜ふ宮殿となしをるハ申迄も無之候得共、御地ニ而兄弟方カ熱心之会堂建築ニ一致なされゝハ実ニグードサインと可申候間、小生も御同様に喜び申候、」

新島は長岡教会が計画している会堂建築に対してグッドサインと述べている。

新島の絶筆の書簡には、長岡人の気骨ある豪胆家を評価している。

「小生ハ元来長岡ニ対し大なる希望を抱き居る者なり、長岡之地理然らしむるカ否々長岡之人民なり、維新之際、長岡人か頭角嶄然東北ニ於而其気骨を顕ハし、破竹之勢

をナし天下を蹂躙した薩長之兵を迎へ、彼之一孤城を以て彼等を支ヘンとせしハ其豪胆思ひ見るへき也、余ハ深く如此気骨ある豪胆家を敬愛する者なり、歴史中余之心を動かす者ハ如此豪胆家なり、戊辰之際長岡之城中に如此豪胆家ありし事ならむ今尚其遺族なからんや、余ハ其遺風存せるの然あるへしと確信せり、余已に此想像あり、此想像あるか故ニ長岡人ニ対しシンパセーを持つ事茲に久し」

新島は薩長の蹂躙に対して勇敢に立ち上った豪胆家を数多く輩出させた長岡にシンパセー（共感）をいだいている。長岡は戊辰戦争の戦場に化し、多くの死者が出た。慶応四年（一八六八年）に勃発した内乱を戊辰戦争と呼ぶ。この内乱によって薩長側は新政権を確立し、封建から近代への変革を一挙に成しとげた。長岡は北越戦争において多くのいたでを受けた。北越戦争が戊辰戦争の一部であり、明治維新のなかで悲惨な体験をさせられた。長岡人を含めて東軍の戦死者の記録は明らかにされていない。まして、長岡住民側の記録は少ない。新島は妻八重の郷里会津を愛したように、新潟の会津としての長岡に共感をもった。

新島は長岡教会初代牧師の白石村治に宛てた書簡（一八八九年四月一日）の中で、長岡を良田なりと述べている。

「小生は未だ御地に遊歴不致候故地理に暗らし、然れ共其地の人物に接するに真に望を可属頼母敷強情にして、事を為に不撓の精神あると切に（譬之長岡戊辰の戦争を見よ）基督教に取りては真の良田と確認申候、故に屢々生徒之新潟行を勧め、及ふ丈ケは御地の為に尽力致し居候次第、殊に長岡の如きは新潟県中人物の剛胆なるよし、真に全力を尽すへき所と認申候、（中略）小生も強壮の身ならは是非御地に踏み込み、一年に一回位は御加勢の為参上仕度候得共、」

新島は長岡を良田なりと定義した。それは長岡の地理的な条件ではなく、長岡人のもつ不撓の精神である。

新島は新潟伝道に従事している広津友信より新潟の地図を送ってもらう。一八九〇年一月七日新潟の広津友信に宛てて新潟県下の伝道策について長文の書面をしたためている。

「御恵送送ノ地図ハ小生ノ鋭を養ヒ旅中之欝ヲ散申候、新潟県ニシテ長岡ノ地位ハ新潟ニ続キテ甚大切之要点ナリ……而シテ長岡ヨリ与板、小千谷町、新丁、今町ニ及ボシ三条ニ常設伝道者一人ヲオキ燕町、白根町、地蔵堂町等に着手シ、柏崎ニモ是非一人ヲオキ椎谷町其近村ニ着手シ、新発田ヨリ充分中条ニ着手シ自治会ノ線路ニ入リ込ミ、五泉ニ一人ヲオキ村松ニ着手シ及フヘクハ津川ニ播種致シタキモノト存候」。

新島は死を前にしながらも新潟県下の伝道の戦略をねっている。

長岡教会百年の歴史は、栄光の歴史ではなく、苦悩と挫折の歴史である。初期のころは伝道師の交代がひんぱんに行われ、二十五年間に十三人も交代している。それだけ越後の自然風土が厳しかったのだろう。

新島が「小生ハ元来長岡ニ対し大なる希望を抱き居る者なり」と述べたように、長岡教会は宣教二世紀を歩んでいる。これも新島の祈りによるところが大きい。

（一九六八（昭和四十三）年大学神学部卒業・日本基督教団長岡教会牧師）

ハーディー夫人への遺言

オーテス・ケーリ
Otis CARY

とうとうワイルド・ローヴァー号がボストンの港に到着したのは一八六五年の南北戦争が終わって、リンカーン大統領が暗殺された後のことだった。テーラー船長がベルリン号のセイヴォリー船長から新島襄を引き継いで一年になっていたが、新島はまだ英語を本格的に勉強するところまではきていなかった。

ボストンの町に出てダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』を買い、自分の体験に合わせながら読んだことも、彼の日記からうかがわれる。勉強する意欲に燃えていた新島の話がハーディー家の方に伝わり、米国までやってきた目的を英語で書くように要求された。苦労に苦労を重ねて書きあげた文から、その確信と熱意が今でも伝わってくる。

この文書は新島に決定的な結果をもたらし、良い方向へ、良い方向へと新島を引っぱって行く端緒となったと見ることができる。

もう二十年近く前のことだが、あのハーディー夫妻の曾孫にあたるゲルストン・ハーディー氏から直接聞いた話がある。それは新島が苦心して書き上げた「脱国の理由」が、なかなかアルフィーアス・ハーディーの目に届かなかったということである。というのは、忙しかったハーディーは、晩方事務所から持って帰って来る数々の報告書や書類が相当な数にのぼっていたらしい。それを夕食後に見るのが習慣であったようだ。

新島の苦心の文章を最初に読んだのはスーザン・ハーディー夫人の方であって、感銘を受けたと伝えられる。そして早く主人のアルフィーアスに読んで欲しかったのだが、報告書その他の重要書類の間になかなか割り込ますわけにはいかなかった。スーザン夫人は辛抱づよく毎晩新島の文章を束の一番上に置くのだが、ビジネス関係の物の方が優先し、アルフィーアスはそれを後廻しにする。とうとう願いに願ったその文に目を通すこととなった。そしてその結果、アルフィーアスが理事を勤めていたフィリップス・アカデミーに世話をすることになった。その時からスーザン夫人と新島との間に、ひとつの精神的なつながりが生れ育つことになったといえよう。

一八八四、五年に新島はヨーロッパ回りで再びアメリカに行くが、スイスのサン・ゴタール峠で息が苦しくなり、遺言の手紙を二通書く。その一通の中には次のような言葉がある。北垣教授の訳文で示せば

「私はジュリーノ牧師に対し、遺体をミラノに葬って頂くようお願いする。そしてこの文章を、アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストン市ジョイ通四のA・ハーディー

氏あてに送って頂きたい。同氏とその夫人とはここ二十年間にわたり私の恩人であった。主がお二人に、この世にあっても、あの世にあっても、十分な酬いをお与え下さいますように。どうかただちにハーディー氏あてに電報を打って頂きたい。…日本に対する私の計画は挫折するであろう。しかし有難いことに主はすでに日本のためにこれだけ多くのことをなしとげて下さった。主が日本においてさらにまだすばらしいことをして下さると私は信じている。…」（全集十巻二九三―九四頁）

このような悲痛な遺書をしたためた新島であったが、幸い生きぬいてボストンにめでたく到着することができた。オハイオ州コロンバスでのアメリカン・ボードの年次大会に出たり、クリフトン・スプリングスで休養をとったり、ハーディー家のメイン州の避暑地で休養をとったりする。再び日本に向かい、京都に戻ってみると、チャペルの定礎式が待っていた。それから大学を創るために全力をそそぐのだが、医者にきつく注意され、新島夫人の監督もきびしく、身体への無理がますますつのっていった。一八八六年にハーディー氏はアメリカン・ボードの運営委員長の席から去り、翌年にはふとした怪我がもとでこの世を去ることになった。

そこで残されたのは、ボストンに着いた初めから新島の目的に関心と同情を持ち、暖かい心を見せてくれたハーディー夫人であった。ハーディー氏歿後から新島自身の死に至るまでの二年半の間に彼がハーディー夫人あてに書いた数通の手紙は、すべてこれをハーディー夫人あての遺言とみなすことができる。それは新島自身、自分の死期の近いことを自覚していることが文面にはっきりとあらわれているからである。

一八九〇年一月二十一日から二十二日にかけてなされた「遺言」の中に、Mr. Hardy／此間より度々手紙を忝ふした」

（全集四巻四一二頁）

とある。このMr. Hardyは死の前年に二、三通手紙をよこしているハーディーの長男のA・H・ハーディーのことかもしれないし、ひょっとすると、Mrs. Hardyを遺言の筆記者が誤記したものかもしれない。現在では簡単に断定できない。とすると、新島の晩年の二年半の手紙の中にハーディー夫人あての「遺言」を読みとることしか、他に方法はあるまいと思う。新島らしい、心のこもった、感動を呼びおこさずにはいられない遺言である。

一八八八年七月四日

独立記念日に当たり謹んでご挨拶を送ります。私は去る十一日に当地に参りました。妻も一緒です。私の警察官である彼女は、私が仕事をしすぎないよう見張っています。かすかに回復しつつありますが、再び健康になることはもうあるまいと信じています。医師によると私の心臓は肥大しており、元の大きさに戻る見込みはなく、私の肉体の生命にはいつ終わりがくるかもわからぬということです。…奥様のことを思うとき、そして過ぎ去ったすべてのことをかえりみるとき、奥様の慈愛に満ちた、絶えることのない愛がたちまち私の記憶によみがえり、私はまるで赤ん坊のように泣いてしまうのです。私は親しくして頂いた人々にお別れの言葉も述べずに突如として死ぬことは厭です。それ故、あらかじめそのようなことをお知らせしておくことは無益かもしれませんが、奥様に対して私の最後の

お別れの言葉と、私のために奥様がして下さった一切の事柄に対して筆舌につくしがたいお礼の言葉を申し上げることなしにこの世を去るとしたら、それは実につらいことです。私は一切を奥様に負うています。お返しするとしても、ただ私の感謝の言葉と、奥様のための日々の祈り以外には何もありません。医師から告げられていますように、もし突然の死により最後のご挨拶を送ることができなかったとしたら、どうかこの手紙を奥様に対する私の最後の言葉と見なして下さいますように。…どうか私の気持をお汲み取り下さいますように。今申し上げることのできない事は、あの世で申し上げたいと存じます。妻と老母に対する私の気持についてはお察し頂けることと思います。私たちの京都の学校と、この島国全体に対する宣教の事業についての私の関心がいかに大きいものであるかは、すでにご存知の通りです。これらの仕事の一切をあとに残していく覚悟はできています。愛する祖国のために、これまでにして頂きましたことについて、御礼申し上げます。今や何を期待し、希望したものでしょうか？ご存じの通り、私は京都の学校をキリスト教主義の大学にしたいという悲願を抱いています。…残念ながらこれからは奥様にあまりお手紙を差し上げられなくなると思います。たとい私がこの世を去ることになりましても、あまり悲しまないで下さい。これは独立記念日のご挨拶としてふさわしくないことはわかっています。けれども自分自身を主の御手に委ねるつもりである以上、共感して下さるわが母上様に対し、どうか私の魂のために祈って下さるようお願いしたいのです。妻が帰ってきました。早くペンをおくように言っています。この手紙の内容は妻にも告げておりません。どうかこのことは他の人々にもおっしゃらないで下さい。私はまだ生きる望みをもっています。しかし、この世を去る準備もできています。

（全集十巻三四五―四六頁）

一八八八年八月十三日

…今あのベランダに腰をおろしていられるとしたら、奥様とお話したり、お話をきかせて頂いたり、やさしい波の音を聞いたり、アイアンシー号が湾内に浮かんでいるのを眺めたりできますのに。ああ、しかしその喜びには何かが欠けています。一年前にハーディー様のご永眠についてシアーズさんから電報を頂きました。あの時に感じたことは、今なお痛いほど感じておりますし、これから先いつまでもそれを感じることでしょう。奥様のために甘い香のする鬼百合の花びらを押し花にしました。心からの尊敬のしるしであります。

（全集十巻三四七―四八頁）

臨終の直前

私はやがて召されます。これまであなたから賜わったご慈愛と親切に対し、また最近送って下さいましたすばらしいプレゼントに対しても、千の言葉を費してもなお私の感謝はつきません。私は今自分の手で書けないのです。私はあなたが私の幸いのためにして下さったすべてに対する感謝の念に心を満たしながら、この世を去ります。

（『新島襄の生涯』　J・D・デイヴィス著　一二七頁）

（大学文学部教授）

妻に宛てた二通の手紙

福本武久

新島襄は書簡の人だったといわれる。現存するものだけでも六百数十通を越えているらしい。なかでも注目されるのは、妻八重に宛てた手紙の多さである。いかに旅行の機会が多かったにしても、あれだけ妻に手紙を書いた人は、ほかに見当たらないだろう。どんなに筆まめでも、相手が自分の妻となると、テレが先に立つものである。生来の律義さゆえか。それとも、もしかしたら……。臆面もなく妻に手紙を書くという行為そのものに、新島襄と八重の夫婦としてのありようを解く鍵があるとみた。

『……御母上様御機嫌克く御越年、殊に御母様には八十四年の御高齢に達され候よし、實に目出度き事と存じ奉り候。右に付ても御年寄の事故、只々日々便りに相成り候は、私と御前様のみ、然るに私は大學の爲と申し乍ら、八十餘日も留守に相成り、此の正月も家におらず、此上御前様が御留守に爲され候はゞ、実に私の病氣がよろしからざるより、御出向の事思し召され、御心配の餘り、若し不慮の事などこれ有り候はゞ、私は甚つらき事にこれ有るべく候』

明治二三年一月三日付の手紙は、このように始まっている。

当時、襄は大磯の百足屋で療養中であった。前年の一〇月、大学設立資金の募集のために東上した襄は、一一月に前橋で胃腸カタルを病んだ。一二月半ばに東京に引き返し、保養のために大磯に向かい、そこで新年を迎えたのである。

妻八重には一二月一四日付の手紙で病状を知らせている。八重は直ちに看病のために東上すると返信したらしい。それに応えて、再度したためたのが、この手紙なのである。

『……成丈け先きの短く爲られ在る御母様へは、私に代わり御つかへされ候て、先き當分御出の義御見合せになし下され度く候、私の病氣よろしからざる時には直に御知らせ申すべく候間、其節は御出下され候になし下され、私も此の冬は成る丈け用心致し、病氣にかゝらざる様仕るべく候』

新島襄は長文の手紙を、このようにしめくくっている。京都の自家で病臥している老母を案じ、八重に上京を思い止まるよう説いたのである。さらに翌一月四日にも、同じ趣旨の一文を書き送くるという念の入れようである。

『昨日も一筆申し上げ候通り、御前様の關東に御出の事は、考ふれば考ふるほど上出来とは思われ申さず』と筆を起こし、『殊に八十四歳にも成られ候御年寄を寒の最中に見

捨てゝ關東に御越し下され候共、御前様にも不安心、又私にも心に甚だ快からず。若しもの事これ有り候節は、實に御互ひに残念、又世間にも申譯なき次第、又如何にも情として忍び難き所あり』

重ねて東上を見合わせるよう厳命するとともに、『私も男なり又クリスチャンなり。少しばかりの事は辛抱仕るべく候間、私に御仕え下され候御積りにて、返す返すも御母様に御仕え下され度く候』と、八重にとっては姑にあたる新島とみに孝養を尽くすよう言いふくめている。

二つの書簡はほとんど同一内容である。伝えるべきは三日の手紙で十分つくされているのに、あえてダメ押したのはなぜなのだろうか。おそらく八重が襄の病状を案じるあまり、東上して自ら看病したいと強く言い張ったのではないかと情勢判断される。

夫の発病を知ったとき、八重は気が気ではなかっただろう。明治一九年、ヨーロッパ旅行から帰った襄はつねに病気がちだった。八重は結婚生活の約三分の一を夫のからだを気遣うことに明け暮れていた。激務の間をぬうようにして療養する襄に付き添って、北海道、鎌倉、伊香保、神戸にゆき、献身的に看病しているのである。

心臓病という不治の病は、何時どんなきっかけで暴れだすか分からない。わずかな体の変調でさえ、それが引鉄となり心臓病が再発、死に至らしめるかもしれないという危険な状態にあった。八重は明治二一年の夏、医師から夫の病状がきわめて深刻な状態にあることを知らされている。事実、この手紙を書いた一週間後の一一日に襄の病状は悪化、一七日には危篤状態に陥り、二三日に四八年の生涯を終えているのである。

そんな八重の心情とは裏腹に、襄は『國の一大事の爲、斯くの如くも關東に止まり、身も度々病に伏し、種々の不自由を感じ申候へ共、私は元より覺悟の上の事、男子の戦場に出ると同様なりと存じ候。然し、御年齢高き御母様には、杖とも柱とも頼むは、只だ私共両人のみ、その壹人たる私は八十餘年も孝養を缺き申候上、御前様も關東の御越し遊ばされ候はゞ、義理と云い人情と云い、何分申譯の立たぬ事共なりと存じ候』などと書いている。母とみの看病を重ねて依頼し、『日々のめしあがりものは、柔らかにして甘きもの、何ぞ魚の軽きものか又は茶碗むしの類を、日々御さし上げ下され、此上は少しも御不足のなき様御注意なし下され度く候』（一月四日付）と、食事のメニューまで具体的に指示するという徹底ぶりだった。襄が母とみの食事の世話まで細ごまと書き記したのは、この手紙がはじめてではないのである。前年の一二月一四日付の文でも、次のように書いている。

『……食物も甘きやわらかき魚類を御さし上げ、最早餘り長き命もこれ有す間敷く候間、御病気の不爲めにならぬ丈けに、御馳走も御さし上げ下され度く候。又クズ湯・あめ湯類は御老體によろしく候間、御差し上げ下され度く候』

病身の老いた母を想うばかりの気遣いからだったろうが、度を過ごせば嫌味が先に立つ。八重はどのように思っただろうか。武家育ちの八重は、たしかに男まさりの気性だった。あるいは家事も不得手だったのかもしれない。けれども、これほどまで度重なれば、妻として嫁としての面子はまるつぶれである。

「そんなことは、男のアナタに言われなくても、よく承知しています。私なりに考えて、精いっぱいやっているつもりです」

ふつうならプライドを傷つけられて、怒りくるうところである。

八重と姑のとみは、とくに折れ合いが悪かったとは思われない。病身の姑をかかえているのを知りながら、あえて関東で発病した襄もとに旅立とうとしたのは、ただのわがままからではなかったとみる。八重はおそらく襄との関係、つまり夫婦の関係性を第一に考えていたからだろうと思われる。

新島襄と妻八重はどういう夫婦だったか。二人の結びつきにさかのぼって考えてみる必要がある。

八重は会津藩士の娘、維新の戊辰戦争では男装して鶴ケ城のこもり、銃砲隊を指揮して戦いぬいた。落城後しばらくして兄の山本覚馬をたよって京都にやってくる。京都の近代化の父ともいうべき兄覚馬の影響で英語を学び、近代女性の先駆者の道を歩みはじめる。しかし賊軍といわれた会津人である。明治維新後の社会、とくに京都では、よるべないストレンジャーであったとみなければならないだろう。新島襄もすでに密航したときから故郷喪失者であったということができる。元治元年六月に函館から脱国した襄はアメリカに渡る。ボストンでキリスト教に入信して、アーモスト大学で学ぶうちに、教育者として生きることを決意、使命感に燃えて明治七年に帰国するのである。ただちにキリスト教主義の学校を開設しようとして、最初は大阪にねらいをしぼったが、果たせず京都にやってくる。そこで八重と運命的に出逢うのである。

ストレンジャー同士の結びつき、それが新島襄と八重の夫婦としての出発点であった。それゆえ夫婦の関係は、当時の日本にあって特異なものだったろう。

結婚を家と家の結びつきと考える日本では、地縁や血縁が背後にある。さまざまな〈縁〉が集団として夫婦を支え、たがいにぶらさがる。襄にも八重にも、そんな強力なバックグラウンドはなかった。故郷を喪失した者同士が、見知らぬ京都の地で偶然に知り合い、結婚したにすぎないのである。しかも、ふたりとも〈耶蘇〉と白い眼でみられる存在であった。とくに襄には、たえず密偵の眼が光っていた。同志社英学校そのものの基盤も、まだまだ脆弱なものであったろう。自分たちを取り巻く周囲との関係は、たえず緊張していたといえる。二人だけで、たがいに支え合ってゆかねばならなかったのである。

襄と八重は、夫婦であると同時に、同志の関係にあった。それゆえ夫が病に倒れたと知ったとき、八重は東上すると強く言いはったのであろう。無意識のうちに〈夫婦〉のありようを第一に考える習慣がついていたのである。夫婦単位でものごとを考える。それはアメリカ的な男女関係のありかたである。

襄は八重の立場と心情を十分理解しつつも、あえて次のように書いている。

『西洋風ならともあれ、私共は日本人にして日本に働きを爲す身にこれ有り候はゞ、夫婦の間柄よりも親の御事は重んじ申候』

この一文からみるかぎり、襄は日本的なクリスチャンのモデル家庭をつくろうとしていたと思われる。大学設立とともに伝道による教化にも情熱を燃やしていた新島襄にすれば、当然の帰結なのである。

二つの手紙から、ほのみえてくるものは……。ひたすら完璧な結婚生活や家庭のビジョンを追い求めようとしていた襄と八重の葛藤である。

（一九六五〔昭和四十〕年大学法学部卒業・作家）

純粋な魂の遺した言葉
――同志社に対する遺言――

笠原芳光

遺言とはなにか。自らの死を意識して人々に言いのこす言葉である。

ある人はそれまでの人生をかえりみ、ある人は家族の行末を案じ、ある人は財産の始末のために、ある人は事業の将来を念じて、さまざまな言葉をのこす。口頭でなされるときもあり、紙に記される場合もあり、散文だけでなく詩歌もある。また、それは死の直前になされることもあり、早くから周到に用意される例もある。

厳密にいえば遺言と最後の言葉とは異る。遺言は本人にとって、あらかじめ考えられ、少くとも意識された言葉であるが、最後の言葉は死に直面した緊迫感のなかで、時として無意識に発せられる言葉である。意味不明の場合もあるだろう。

歴史上に名をとどめるような人物にとって、とくに最後の言葉は後世の伝承や伝記作者によって潤色されたり、創作されたりすることもなしとしない。イエスの「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひし」も、ラブレーの「喜劇は終った。幕をひけ」も、ゲーテの「もっと光を」も、その真疑や意味はかならずしものちに解されているとおりではない。

ところで新島襄はどうであったか。『新島襄全集』第四巻の「遺言」によれば、新島はかなりの量の遺言をのこした。それも口述筆記のあと本人が確認したもの、周辺の人々に与えた言葉、さらに和歌、そして最後の意味不明の語も明らかにされている。遺言としては、きわめて豊富な例であろう。なお伝記などには、この全集第四巻にはない言葉が遺言として書かれている例もあるが、ここではとりあげないことにする。

しかも新島の場合、その遺言は死の前の三日間にわたってなされている。全集第十巻に付された「略年譜」によると、新島は同志社大学設立の募金活動のため関東に滞在中、病気になり、神奈川県大磯の旅館百足屋で療養していたが、一八九〇（明治二十三）年一月二十三日午後二時二十分に急性腹膜炎のために亡くなった。

新島は死の二日前の一月二十一日午前五時半に、新島八重子、小崎弘道、徳富猪一郎の立合いのもとに最初の遺言を口述した。さらに筆記されたものが朗読されるのを一つ一つ聴いて首肯したという。これは新島の多くの遺言の根幹となる言葉である。ここではとくに、その前半を引用して考えてみたい。

「同志社の前途は基督教の徳化、文学政治等の隆興、学芸の進歩三者相伴ひ相待て行

ふ可き事」

このなかで「文学政治」と「学芸」とある言葉の区別は判然としないが、要するに同志社はキリスト教の精神と学問とをともに発展させなければならないということであろう。同志社のキリスト教は、それ自体がさかんになるよりも、それが学術文化を動かすものとなることを念じているのである。

これは一八八八（明治二十一）年十一月に発表された「同志社大学設立の旨意」の一節に、「吾人は基督教を拡張せんが為めに大学校を設立するに非ず、唯だ基督教主義は、実に我が青年の精神と品行とを陶冶する活力あることを信じ、此の主義を以て教育に適用し、更に此の主義を以て品行を陶冶する人物を養成せんと欲するのみ」とあるのと軌を一にする思想である。

「同志社教育の目的は其の神学政治文学科学等に従事するニ係らす皆精神活力あり真誠の自由ヲ愛し、以て邦家ニ尽す可き人物を養成するを務む可き事」

これもまた同様の趣旨に基いている。「精神活力」や「真誠の自由」はキリスト教が一般の世界にあらわれた形を示している。キリスト教は教義でも、いわゆる宗教思想でもなく、まさに精神として、自由として発揮されなければならない、と新島は考えていた。ここに同志社のキリスト教の自由主義的な特色があらわされている。

「社員たるものハ生徒ヲ鄭重ニ取扱ふ可き事」

自由とともに新島の思想としてあったものは平等である。新島が他人に対して、その年齢、地位などにかかわらず平等に接したのは米国で体得した民主主義の精神によるといえるだろう。生徒に対しても鄭重を旨としたことは、生徒や卒業生の個人や集団に宛てて多くの書簡を送っていることからも知られる。

たとえば全集第三巻の明治二十年六月十九日付で同志社五年卒業生に宛てた手紙には、「進メ進メ好男児決シテ退歩ノ策ヲ為ス勿レ、諸君ヨ今日我カ日本ノ改良ハ襄諸君ニ望ムニアラスシテ将タ何人ニカ之ヲ望マン」と記されている。

「同志社ニ於てハ倜儻不羈なる書生ヲ圧束せす務めて其の本性ニ従ひ之ヲ順導し以て天下の人物ヲ養成す可き事」

「倜儻不羈（てきとうふき）」とはぬきんでてすぐれ、束縛されないという意味である。そのような学生を抑圧することなく、本性を生かして指導し、大人物たらしめようというのである。ただ学生を鄭重に扱うだけでなく、自由にのびのびと育てるという、この新島の教育方針によって、少くとも初期の同志社から多くの大人物が生まれた。

今日の同志社はどうであろうか。大人物とは地位や名声をいうのではない。才能でもない。それは大いなる志をもつ、自由な人間をいうのである。

「同志社は隆なるニ従ひ機械的ニ流るゝの恐れあり切に之を戒慎す可き事」

開学以来十五年にも満たない時点で、すでにこのような憂慮があるとすれば、それ以後の事態をいかに考えるべきか。管理化の多寡は集団の規模の大小に比例するという宿命のなかで、せめて「切に之を戒慎す」る精神を不断に新たにすべきであろう。

この遺言は、そのあと金森通倫を後任にすることに差支えはないが、金森は実務的能力にはすぐれていても、教育者としての徳に欠けるとして、「是れ余の窃かに遺憾とする所ナリ」とのべている。金森は新島と対蹠的な人

物であった。死の直前とはいえ、率直な発言である。

また東京に政法理財学部を設置するという案は目下の事情では避けがたいとのべ、日本人教師と外国人教師の間をうまく調停し、円滑にゆくようにと願っている。

さらに、自分は平生敵を作らぬように心掛けてきたが、もし自分に釈然としない人があるなら寛恕してほしいとのべ、これまでの事業は自分の功ではなく、同志諸君の翼賛によると厚情を謝している。

最後に「右筆記の上之ヲ朗読す先生一々之ヲ聞き首肯す、時に午前七時十分前」とある。遺言を語りはじめてから一時間四十分を要したことになる。

これらの遺言を見るに、ことごとくが同志社に関することである。新島がいかに同志社のためにのみ生きてきたかが端的にあらわれている。新島はもともと純粋、懸命、一途な人間であり、多方面にわたって関心をひろげ、好奇心をはたらかす型の人物ではなかった。それはいいかえれば単純ということでもある。

少年時代から海に憧れ、祖国を脱出してまで米国に渡り、使命に燃えて帰国、困難を冒して同志社を建て、教会をつくり、教育と伝道に専念し、晩年はとくに大学設立の募金に奔走するという、まことに直線的な生きかたをした人である。

高潔な人格において人々を魅了したことは疑えないが、それにしても、もうすこし余裕や遊びの精神が必要ではなかっただろうか。四十七歳という短命も、そのゆえではなかったかと惜しまれる。

全集第四巻によれば遺言は、その一月二十一日にさらに続いてなされている。井上馨、北垣国道、渋沢栄一、あるいは大隈重信、伊藤博文、勝海舟、陸奥宗光といった学外の要人たちに、今後も同志社のために心を懸けてほしいと願い、横井時雄、横田安止、波多野培根、広津友信、大久保真次郎ら弟子ともいうべき一人々々に短い言葉を遺している。

翌二十二日には、かねて親しんでいた、つぎのような和歌を辞世として遺した。

「芳野の山花咲く頃の朝な〳〵心に懸る峰の白雲」

「余か同志社ニ関する感情常ニ此の歌の如し」

とあるから、同志社にのみ心を懸けた生涯であったことが哀しい。そして「天ヲ怨ミス人ヲ咎めす」といったというから、すでに死を受容する心境に達したのだろうか。

最後の日、一月二十三日には午前三時五十分に「モー十六日限り。十六日迄ハ伊勢ハ……」という意味不明の言葉を口にした。「伊勢」は横井時雄の別名かも知れないが、このような言葉が、そのままのこされていることは、いたずらに故人を美化する考えのなかったことを示している。終焉は午後二時二十分であった。

新島襄没後百年を迎えようとして、あらためて遺言を読んだ。同志社が生んだ自由な精神、豊富な人物、多彩な思想、それらはすべて、この一個の純粋な魂から発し、またそこに帰るべきものであることを銘記したい。

（一九五二［昭和二十七］年大学神学部卒業・一九五四［昭和二十九］年大学院神学研究科修士課程修了・京都精華大学学長）

終焉の地・大磯

尾崎憲治

明治四十年（一九〇七年）東京冨山房発行の河田　羆著『大磯誌』によると、江戸時代末期の国図には相模国淘綾（ゆるぎ）郡大磯驛他十九村と記され、明治二十二年（一八八九年）の三月、神奈川県大磯町他十九村を淘綾郡、さらに同三十年四月、淘綾・大住の二郡を合併して中郡とし、郡役所を大磯町に設置したとある。それに伴って区裁判所の出張所や登記所の他警察署、郵便局、税務署などが出来た。当時の大磯町は人口約八千人、本邦初の海水浴場の賑わいと共に、一時は二百を越える別荘がこの町に集中した。

明治二十二年（一八八九年）という年は、新島が病躯を押して大学設立の募金に心血を注いで、悪戦苦闘を重ね、諸教会とその伝道者の問安激励に東奔西走ののち、その年の暮れ終焉の地大磯に倒れこむように辿りつくという、波乱の生涯に最後の光芒を放った年である。

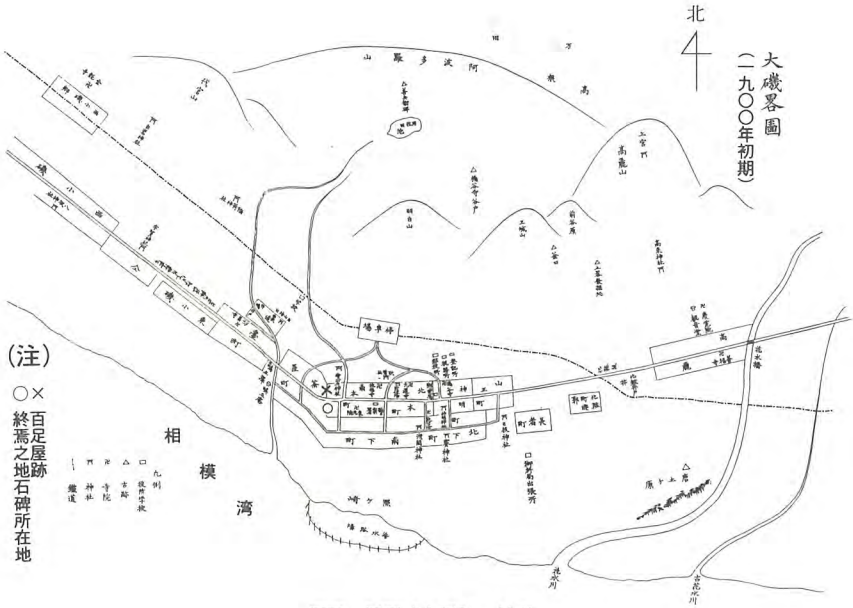
大磯とその周辺については、万葉集、古今集、後撰集、拾遺集、吾妻鏡、延喜式などにしばしばその名が見られるが、いずれも淘綾（ゆるぎ）または餘綾（よろぎ）が多い。今でもこの辺りの長く伸びた美しい海岸線は、『こゆるぎ』あるいは『こよろぎ』の浜と呼ばれ、各種の同好会や同人誌などの呼称にこの名が好んで用いられている。

また大磯という名称は、平城天皇の大同年間（八〇〇年頃）の文書に「大磯を初めて驛とし」とあり、文明年間（一一八〇年頃）の回国雑誌には『大磯宿』、徳川時代の正保国図には『大磯』、元禄国図では『大磯町』、その後再び『大磯宿』、さらに『大磯驛』と呼ばれてきた。そして最終的には前述のとおり、明治二十二年新たに『大磯町』となった。

明治十八年（一八八五年）、当時の軍医総監松本　順の推奨によって、大磯は海水浴場のある保養地、今風にいえばウォーター・フロントのリゾート地として一躍脚光を浴びるようになった。松本は大磯について、「その風光名状すべからず。しかのみならず、大気清爽にして、ひとり浴潮の宿痾を療するのみならず、亭舎の清潔、魚介の鮮美なる、まことに摂生の佳境なり。」（前掲書）と述べている。

軍医総監が太鼓判を押してのこの賛辞に、当時最新の交通機関であった鉄道列車に乗って東京から二時間あまりの大磯、朝野の名士はもとより、著名芸術家・作家など、その頃の上流・知識階級のステータス・シンボルを誇示する、時代の先端をいく避暑避寒の高級保養地となった。

松本によれば、当時「潮もみ」と呼ばれた



河田　羆著「大磯誌」付表

海水浴の効能は次のとおりであった。

一　皮膚薄弱…感冒（カゼ）ひきやすき習癖、貧血（特に病後疲労の者）、腺病

二　胃腸病

三　神経に因する諸病…脳病、歇私埜里（特に、潮を湯にして浴すればよい）

J・D・デイヴィス著『新島襄の生涯』によれば、最後の一八九〇年一月十七日に、「東京在住の日本の最良の医師の一人が診察に呼ばれた。それは腹膜炎と診断され、今や非常に危険な状態にあることが告げられた。」とある。また、森中章光著『新島襄先生の生涯』では、死の前年患った腸胃カタルが意外に重いものであったと記している。　こうしたことを考え合わせると、医師をはじめ、当時のほとんどの人たちが、新島の静養に最も適切な場所として、まず大磯を思いうかべたのも極めて自然なことであったと思われる。

森中著の前掲書の中で、間もなく最後を迎えようとする新島は、師走の大磯から徳富宛てに手紙を書き、彼が特に嬉しく思ったことは暖かな気候で、障子を開けっ放しにしておいても、少し外へ出てみても少しも寒く感じないので、この分だと随分健康に良いように思われるという意味のことを伝えている。

新島はこの三週間後に危篤状態を迎えるのであるが、壮烈な短い生涯を閉じる直前、僅かではあったが憩いと慰めのひとときを、神が、この大磯の地に、彼のために備えておかれたと思わずにはおられない。

新島の大磯での宿は百足屋（むかでや）であった。彼はその別館・離れ座敷の愛松園に寝泊まりしてた。明治二十三年（一八九〇年）の朝倉誠軒著『大磯案内』によれば、当時の大磯には昔からの旅館が大小十一軒あり、中でも百足屋（同別荘、愛松園）、宮代屋（同分館、大内館）

開設当時の大磯 海水浴場の「潮もみ」風俗

を筆頭に挙げている。この大内館は現在も営業中で、外観にも内部にも当時の様子を偲ぶことが出来る。海水浴場としての賑わいが高まる明治二十年代には旅館数も二十軒に増えたとある。

新たに開業した旅館は、今のホテル・ブームを想わせるものがあって興味深い。海水浴場に直面する豪壮な涛龍館は、客室五十で茶代（心付け・チップ）を廃して室料のみとし、飲食は来客の希望によって自由、室料とは別途料金制であった。また、同じ頃に建った招

新島襄先生終焉之地碑

仙閣は、鉄道の大磯駅（現在の駅の表柱には大磯驛と書かれている）の北口に面した山の傾斜を利用して、来客の足の便と高台からの見晴らしの良さを売りものにした。つまりその頃の大磯では、現代のレジャー産業に共通の大衆化・大型化・機能化・高級化などの原初的な傾向が、先取りした形ですでに採り入れられていたのである。

新島がその生涯を終えた百足屋の主人は、海水浴場の開設を梃に、大磯の再興に大きな貢献をした宮代謙吉である。彼の献身的先駆的な働きがなかったなら、東海道の宿駅廃止後衰退の一路を辿りつつあった大磯に、昔を上回る繁栄を再びもたらすことは不可能であったとさえいわれている。しかし、その老舗も時代の波にのまれ、やがて消滅していく運命にあった。大正六年（一九一七年）発刊の『大磯案内』には、もはや百足屋の名は見当らない。

こうした中で、一八八〇年代の後半から一九二〇年頃にかけての最盛期には、神奈川県中郡のこの小さな田舎町に二百以上の別荘、二十数軒の旅館を初め、当時としては珍しい写真館、書店、西洋料理店、菓子舗、割烹、

貸席、芸者置屋などが軒を連らね、その上遊郭までであった。

新島が静養していた百足屋は町の繁華街の西のはずれにあった。おそらく宿を出ると大磯を東西に走る旧国道に面し、それを渡ると目の前に海水浴場に通じる緩やかな坂道の上に出た筈である。この坂道に入らないで国道沿いに百メートル程西に向うと、西行法師の俳諧道場で知られる鳴立庵がある。これは先年全面的に改修され、木の香りがまだすがすがしい。元の坂道に戻り、東へ歩いて数分の地福寺の庭には明治の文豪島崎藤村夫妻の墓碑が梅の古木の下に静かに佇立している。

この辺りで今も当時の面影をとどめていると思われるのは、愛松園跡の北裏の小高い場所にひっそりと建つ愛宕神社の祠、その下の切り通しを挟んで、こんもりとした樹々の中にひそむ旧岩崎弥太郎の別荘、今は故澤田美喜が設立したエリザベス・サンダース・ホームが見える。再び国道に出たところにある和菓子の老舗『新杵』、国道沿いに東へ、前述の地福寺の入口近くの『和泉屋』、当時から肉類・洋酒・高級調味料などを扱っていた。その向い側少し西寄りに鰻料理の『国よし』、先に述べた旅館『大内館』、百足屋の真向いに当る位置には、今も照ケ崎海水浴場入口を示す花崗岩の大きな石柱が立ち、その先に蒲鉾の『井上』が往時の繁昌ぶりを今も続けている。

『井上』の手前、石垣の上に植込みの小庭園風の茂みがある。そこには碓氷峠から截り出した安中石に、徳富蘇峯の揮毫による『新島襄先生終焉之碑』が建っている。

新島がその生涯を閉じた愛松園跡には、最近になってモダンな高級住宅地としてのイメージと、国際会議場を含む白亜高層のホテル、ゴルフ場、広大な敷地に各種プールなどをもつレジャー・ランドとしてのイメージとが、百年前の別荘地・保養地としての大磯のイメージにとって替ってしまった。町の行政当局も、港周辺にヨットを中心とするマリン・スポーツ基地の建設計画を打ち出した。昔の賑わいをもう一度夢みるこの計画は、案に相違して住民の烈しい反発を買って中止に追いこまれてしまった。

外来の客の懐に依存する意識の根強いこの旧宿場町でも、寝て待つ果報を夢みることの空しさ、その愚かしさを自覚的に克服しようとする兆しが見え始めている。

昔から外来者の多くは、大磯に経済的な潤いをもたらした。また幾人かは文化的な刺激と恩恵を残していった。この意味では新島がこの町に与えたものは何もない。しかし、彼の没後百年、一人の日本人が志を高く保ち、国際的な視野の広がりの中で、この国を深く愛して苦闘しつつ、一身を賭して良心のありようを指し示したという事実は、徐々にその量り知れない影響力を見せ始めている。

毎年一月二十三日になると、東京から駆付ける同志社の校友・同窓に伍して、町の人々が新島の碑前に集い、町長が感想を語り、吟友会の面々が大磯で詠んだ新島の最後の詩を唱和して献詠し、参会者も次々に碑前に進み出て偉大な先覚者を偲ぶ行事が続けられている。

ふと振りかえってみると、大磯の人たちが、この行事をいつの頃からか『新島祭』と呼びならわすようになってもうかれこれ二十年になろうとしている。

（一九五二（昭和二十七）年大学神学部卒業・一九五四（昭和二十九）年大学院神学研究科修士課程修了・東海大学講師）

新島襄の葬儀

河野仁昭

永眠と葬儀の準備

神奈川県大磯の旅館百足屋における新島襄の臨終の模様を、八重夫人は次のように書いている。老母がいることだからと、家を留守にすることを新島から手紙でとめられていた八重は、永岡喜八が打電した危篤電報に接して大磯へ駆けつけたのであった。

「妾は（一月）二十日朝出立して其夜十一時大磯に着す。嗚呼替り果たる顔、実に何と言い出す様もなし。小崎（弘道）、徳富（猪一郎）両兄既に御出下され居り幾何か心強く感じけるが、亡愛夫の容態を見たる折り、とても全快は六ケ敷有るの様子なりき。面会の折亡愛夫申すには、此度は他病（ママ）か実に今日は苦しく、又た今日程汝を待長き一日はなかりしと。実に愛情厚き事妾死すまで、又た後世までも忘れ難し。（中略）明治二十三年一月二十三日、最愛の夫は二時四十分此世を去る。妾の左手を枕とし、幾度呼ても答へ無し」

この手記（片カナを平がなに改めた）の日付は二月十日となっている。

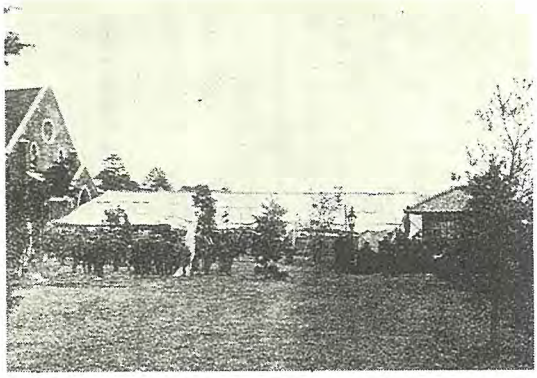
新島が、八重、徳富、小崎の三名を枕頭に呼んで遺言を筆記せしめたのは、八重が着いた翌二十一日午前六時からで、約二時をかけての口述であった。

一月二十五日付で八重の名義による「死亡届」および「埋葬認可願」が提出されるが、その「埋葬認可願」には次のように記されている。

「京都市上京区松蔭町十三番戸
一、急性腹膜炎症　　新嶌　襄
天保十四年一月十四日生
右之者相州大磯駅百足屋に於テ本月二十三日午後二時二十分病死致し、来る二十七日午後一時南禅寺天授庵へ埋葬仕候ニ付、認可証御下附被下度此段奉願候也」

死因は急性腹膜炎。埋葬地は南禅寺天授庵の墓地を予定していたことが、これによって明らかである。その墓地には明治二十年一月三十日に永眠した新島の父民治が葬られていたから、襄も当然そこに葬るべきものとだれしも考えていたであろう。それは新島のかねてからの遺言であったといわれるが、裏付ける資料は見出されていない。八重にはそう言っていたのであろうか。

それはともかく、新島の遺骸は一月二十四日午前八時八分大磯発の列車で京都に向かい、その日の午後十一時三十分に七条ステーションに到着した。遺骸と共に駅に降りた人



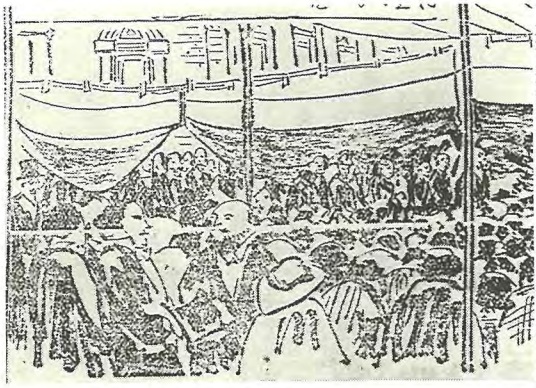
礼拝堂の前に設けたテントの葬儀場

たちは、八重、J・C・ベリー医師、金森通倫、加藤勇次郎、中村栄助らの他、「新島先生葬儀記録」（以下「葬儀記録」と略称）によると、小崎弘道、大西祝、青木要吉、新島公義、田中賢道、綱島佳吉、杉田潮、杉山重義、大久保真次郎、河波荒次郎、新井毫、不破唯次郎、横田安止、永岡喜八、鈴木清、松山高吉らであった。これらの人が新島の臨終に立ち会うか、悲報を聞いて百足屋へ駆けつけたものとみてよい。ただし、徳富猪一郎の名がみえないのは社用のため東京へ帰ったからであろうし、同様の人は他にもいたであろう。磯貝由太郎（雲峰）もその一人で、彼は「大磯涙の記」を『女学雑誌』第一九八号（明治23年2月）に掲げている。新聞を除けばこれが最も早い追悼文の一つである。

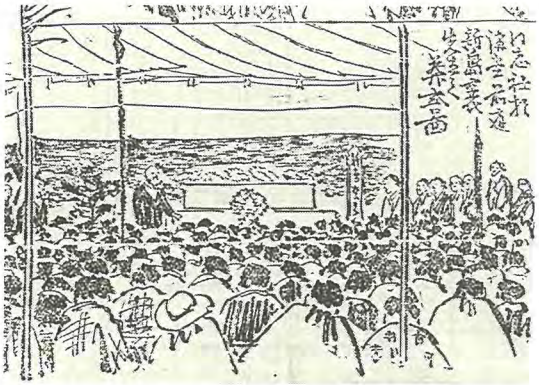
七条ステーションに遺骸を出迎えたのは六百余名。それは「同志社教員、職員、及び男女両校生徒並平安教会、四条教会、交話会員中有志者、及び他校生徒数名等」（「葬儀記録」）であった。遺骸は普通科各学年、神学科、邦語神学科を七組に分けて交替で担われた。新島宅までの順路は、七条ステーション―不明門通り―万寿通り―御幸町通り―丸太町通り―寺町通り―新島宅で、途中から「雨雪菲々として道路泥濘、故に歩行最も困難を極む」（同右）といった状態に見舞われた。街灯はなく、街路の舗装などもちろんなされてはいなかった。その深夜の道を黙して歩む生徒たちの頬をぬらしたのは、雨雪のみではなかったろう。

同志社では、翌日、葬儀の準備から執行までの役割分担を、次のように定めた。

総取締　宮川経輝
通信掛　加藤寿、足立通衛、鈴木彦馬
庶務掛　主任・大沢善助、副任・金谷充
式部掛　加藤勇次郎、大沢善助
応接掛　中村栄助、堀貞一
用度・会計掛　広瀬源三郎、島田遠
進物掛　志垣要三、村田栄次郎
受付掛　津田次郎治
死亡通知のはがきは、中村栄助、金森通倫、



葬儀場を埋めた会葬者（背後は礼拝堂）



葬儀場内、正面は新島の柩

小崎弘道、徳富猪一郎の連名で、京都、大阪、兵庫は一月二十四日、それ以外の地域については徳富の負担で東京から発送された。総枚数九五〇枚であった。北垣国道など主だった十五名には、逝去の模様をやや詳しく記した書面が送られた。また、同日付で「中外電報」「日の出新聞」「朝日新聞」「又新日報」その他諸新聞の特別広告欄には死亡広告が掲げられた。いずれも右の四名の連名によるもので、末尾には、「一月二十七日（月曜日）午後第一時より同志社公堂にて挙式、終りて南禅寺墓地に埋葬す」と追記されている。

翌二十五日には海外留学中の同志社関係者に、新島の逝去が打電された。

葬儀の前日、二十六日は日曜日であった。同志社チャペルでは午前八時から全校生徒による追悼会がもたれ、露無文治の司会で、小崎弘道と横田安止（普通科生徒）が「先生病中の状景」を述べ、ゴードン、デイヴィス、光延品七（邦語神学生）、松田順平、不破唯次郎、金森通倫らが「先生生前言行上之所感」を語った。

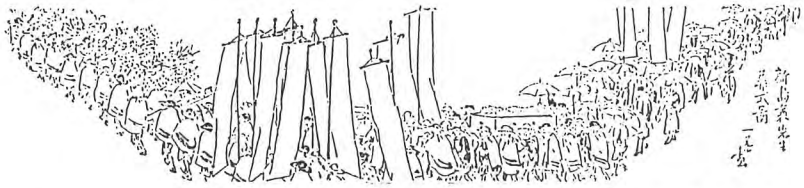
会のあと、午前十一時から女学校生徒が、十二時から男子学校生徒が、新島宅で遺骸に対面して、それぞれ最後の告別をした（「葬儀記録」）。生徒たちは、師の逝去がいかなる苦闘の結果であるかを知っていたのみでなく、いかに愛されていたかを知っていた。

葬儀

明治二十三年一月二十七日正午から、新島宅で家族、親族、親友たちによる出棺式がいとなまれた。司会・阿部政恒、聖書朗読・片桐清治、祈禱・阿部政恒、そして讃美歌という簡素な式であった。（「葬儀記録」）

柩の同志社への順路は、新島宅―寺町通り―今出川通り―華族会館東通り（現在の大学図書館と明徳館の間）―チャペル前であった。同志社教員、職員、牧師・伝道師などが柩や墓標を担い、生徒は立花や旗を持って列の先頭を歩いた。チャペル前に大テントを張って仮設の式場とした。会葬者の数を予想してである。西側が入口で、柩は東奥正面に安置された。

D・W・ラーネッドの「回想録」に、「葬式は公会堂の前に建てられた仮の礼拝堂で、二十七日の月曜に取行はれた。今も一つの石が、其際柩の置かれた跡を示してゐる」とある。たまたま二十二年十一月に定礎されたハリス理化学館の建築中で、テントの東側は工事現場だったのだから、柩が置かれた位置は、チャペルよりあまり東ではなかったろう。残念ながらその位置を示す石は、戦後、敷石を並べたり生垣をめぐらしたりする過程で失われ、現在では確認のすべがない。



式場内は、柩の右に「新島襄の墓と記せる普通大の墓標」を立て「前面には紳士の席を設け、左方を以て女席となし、其余は生徒及び会葬者の席にして満場真に立錐の余地なかりしにもかかはらず、場内寂として人なきが如く先生の柩がなせる無言の説教に各袂を濕したり」（『国民新聞』第四号、明治23年2月4日）といった状態であった。

J・D・デイヴィスの『新島襄先生伝』（山本美越乃訳）には、「三千人の席を（テント内に）設け尚一千余人幕外に佇立するを見る」とあるから、四千人を越える会葬者があったものと思われる。

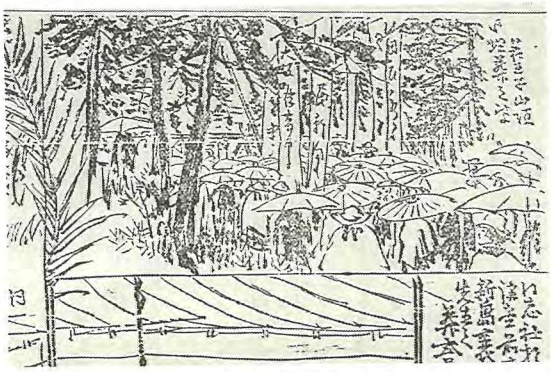
当時、英学校普通科の生徒であった小林正直は、「入口の左右には『自由教育』『自治教会』なる旗が翩翻として翻りたる事を記憶し居る」（「霊柩を担ぐ」『新島先生記念集』所収）と書いている。新島宅から担いできた旗を、式場の入口で生徒が持って立っていたのだろう。

「葬儀記録」には会葬者三千人余となっており、「（北垣）京都府知事、（中井）滋賀県知事、（富永）京都始審裁判所長、大阪控訴院長児島惟謙、曽根京都始審裁判所上席検事、尾越・森本京都府書記官、板垣退助伯の代理片岡健吉氏を始め全国各教会牧師、伝道師及び信徒、各地新聞記者、府県会議員、諸会社の役員、諸学校の教員、生徒等なり」と記されている。

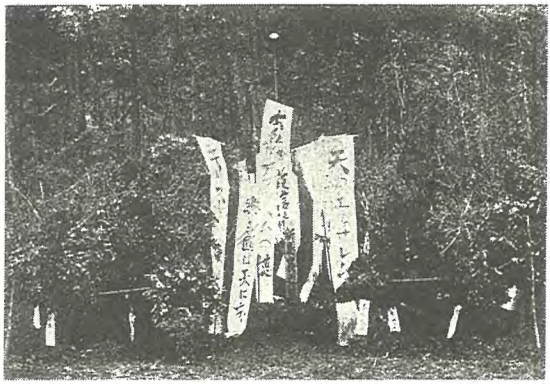
「会葬者名簿」に記載されている教会、学校など団体名をあげると次のとおりで、団体名や代表者名のみでなく、それらに所属する個々の会員や教員なども「会葬者名簿」に名を記しているケースが多い。

「平安教会、四条教会、熊本旧大江義塾、泰西学館、大阪三一神学校、神戸多聞教会、相国寺僧堂、京都商業学校、明治学院、永山教会、大阪仏教信徒、西群馬教会、神戸教会、第三教会、大阪教会、堂島教会、安中教会、神戸神学校、今宿教会、浪華教会、島田教会、彦根教会、岡山県教会員、万田教会、神戸女学校、宮教会、第三高等中学校」

明治学院の総代は植村正久。大阪府知事代



雨中の送葬の列（南禅寺あたりか）



埋葬直後の墳墓(中央に木の墓標が見える)

理、渋沢栄一代理などの名もみられる。

永眠もしくは葬儀に際して弔電や弔辞を送ってきた人はおびただしい数にのぼるが、そのうち「会葬者名簿」に名前が記されていないか代理を派遣してきた主な人は、土倉庄三郎、原六郎、板垣退助、松方正義、大隈重信、富田鉄之助、後藤象次郎、井上馨、榎本武揚、福士成豊、菊池侃二、内村鑑三、木村熊二、井深梶之助、島田三郎、青木周蔵、岩崎弥之助、佐々木豊寿、渋沢栄一（立花一対）らである。

式次第は次のとおりで、午後一時の報鐘とともに始められた。

司会　松山高吉

(一)讃美歌（第五十五番）
(二)聖書朗読（エペソ書第三章）　山中　百
(三)祈禱　宮川経輝
(四)讃美歌（特吟第二百一番）　オルチン
(五)履歴朗読　綱島佳吉
(六)説教（約翰十二章二十四節題）　小崎弘道
(七)祈禱　デビス
(八)讃美歌（第二百十番）
(九)祝禱　杉田　潮

意外に簡潔な式であったという印象を受ける。小崎の説教の大意は「殉教者の死」という題で、池本吉治編『新島先生就眠始末』（警醒社、明治23年4月）に掲載されている。「一粒の麦若し地に落て死ずば唯一にて存ん。若し死ば多の実を結ぶべし」という聖句を引いてのもので、「先生の死たる事業の為に其命を棄てたるものにて、或人が唱へたる如く、或る意味に於ては殉教者の死と謂て可なり」と述べたのであった。

葬送と埋葬

新島の遺骸は、南禅寺の天授庵の墓地に埋葬する予定であったことはすでにみた。この墓地には、戊辰戦争で戦没した肥後藩士の墓が多数あり（会津藩士の墓は黒谷、薩摩藩士の墓は相国寺）、横井時雄の父小楠の墓もここにある。そうした関係があったので、新島の身近にいた熊本バンドの人たちが、黒谷が難色を示した新島の父民治の埋葬地をここに斡旋したのであろう。しかし、そのとき寺との交渉に当たったのは、中村栄助であった（中村宛、明治20年2月6日付、新島書簡）。

黒谷金戒光明寺の墓地には、明治十二年十月二十三日に没した新島の第三姉美代の墓があり、明治十四年十一月八日に亡くなった同志社教員山崎為徳の墓もあった。おそらく元会津藩士の山本覚馬や、妹の新島八重らの斡旋によることであろう。ただ、山崎の埋葬の際に、次のようないきさつが

鞍馬石による墓碑が立つまでの新島の墓

あったようである。

「埋葬するのは寺の証明を要した。然るに同志社の教師の中にゴルドンと云ふ人があって、非常ニ堅い人であったから、基督教の式でやらうと思った。然るに仏教の側では、仏教が認めなければ埋葬の出来ないと云ふ事を知らせる為めに余計に言ひ張って、遂う〳〵洛陽教会で式、洋式（即ち基督教）で挙げて寺へもって行くと云ふ事ニなった。形の上では仏耶二教の式ニ依った訳である。そして黒谷へもって行くと、僧侶が経を読み仏葬にした」（『創設期の同志社』所収「葛岡龍吉」）。

しかし、同志社が建てた墓は純然たるキリスト教徒のものであり、その後、墓前では、キリスト教の式による永眠記念集会などもおこなわれたろう。民治の埋葬に黒谷が難色を示したのは、そうしたいきさつがあったからだと思われる。現在でも寺は檀家でなければ墓地を提供しないのが普通だから、キリスト教徒の埋葬を拒んだとしても、いちがいに寺のみを責めるわけにはいくまい。キリスト教徒は全国どこにおいても墓地の問題に困っていた。

南禅寺から新島の埋葬に関して通知してきたのは、葬儀の前日であった。「葬儀記録」は次のように記している。

「同寺にてハ故障を唱へ、新島襄氏ハ耶蘇信者にあらざる事、葬式ハ万端耶蘇の式を用ひざる事、耶蘇信者なりとの紀念碑を設立せざる〔事〕等の証明書を出すべしと申込みたるにより、俄かに若王子山墓地に葬ることに改む」

これは遺族はもとより同志社としても受け入れるべくもないもので、明らかに南禅寺の拒絶である。折衝の余地はないと判断したらしい関係者は、寺とは一切かかわりのない若王子墓地に、埋葬地を急拠変更した。現在もその墓地は京都市が管理する共葬墓地である。

この若王子山は、熊本バンドの第一回奉教記念会（明治十年一月三十日）の場所になるなど、同志社の生徒には比較的なじみ深い山であった（『創設期の同志社』所収「海老名弾正」「小崎弘道」「深田照」など参照）。だから、南禅寺の申し出に憤慨はしたであろうが、埋葬地の変更にさほど悲愴感などはなかったかもしれない。小山とはいえ市内が一望でき、新島が精根を傾けた同志社も遠望できるのだ。

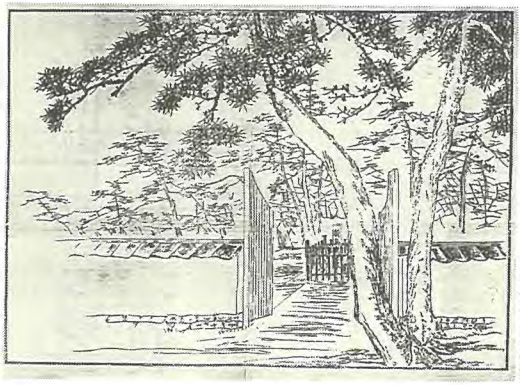
若王子への葬送は次の順路がとられた。

同志社―鳥丸通り―今出川通り―寺町通り―三条通り―広道―南禅寺―山頂

南禅寺から山頂へのコースは「葬儀記録」には記していないが、デイヴィスは「尚北行して若王子（寺）社前、小瀑布右側の山径を攀ぢ山腹樹木繁く影曠き処に達す」（『新島襄

先生伝』）と、やや具体的に書いている。デイヴィスのこの伝記を除いて、南禅寺から山頂への経路を書きとめたものは目下のところ見当らない。おそらく現在の参道とほぼ同じ杣路を登ったのであろう。

葬儀がはじまってまもない午後一時半ころから雨になり、「為めに葬送者も大に減じ、且ツ道路泥濘なるがゆへ歩行困難」であったとはいうものの、「葬送者の総数ハ明知する能ハずと雖も凡ソ三千人余にして、行列の長は十二三町程なりしと見受けたり」（「葬儀記録」）とある。一丁は約一〇九メートルである。京都商業学校生徒、大阪仏教信徒その他、沿道で見送る人も少なくなかった。葬列の順序は、



整えられた新島襄の墓域

第一　押へ
第二　立花（二列）三十五対（同志社生徒之を携ゆ）
第三　旗十五旒（民友社、旧大江義塾生徒、同志社普通学校生徒、同志社予備校生徒などの寄贈）。民友社寄贈のものは勝海舟の揮毫になるもので、「自由教育自治教会両者併行邦家万歳」と書かれていた。「新島先生常に徳富氏に語り玉ひし句」（「葬儀記録」）だという。
第四　同志社生徒（各二列）
第五　墓標
第六　柩（同志社生徒各級にて交互に之を舁す）
第七　親族（腕車五十挺）一列
第八　同志社卒業生（二列）
第九　社員、教員、職員（各二列）
第十　牧師、伝道師
第十一　各学校、各教会、各会社惣代、其他諸惣代（二列）
第十二　徒送・二列
第十三　車送

三千人余のすべてが埋葬地まで登ったとは考えがたい。おそらく寺町三条か南禅寺まで葬列に加わった人が多かったものと思われる。

山頂に達したのは午後五時前。「葬送の事は校外の人に触れしむべからず」と、同志社生徒たちは「墳穴も手づから之を掘」ったと、デイヴィスは先の伝記に書いている。

山頂での埋葬の式は、司会・中村栄助、讃美歌（二〇六番）、祈禱・ラーネッド。埋葬を終えたのは午後六時頃であった。一月末の雨の若王子山頂は、暗黒の闇にとざされていたはずだ。だが、デイヴィスは力をこめて『新島襄先生伝』に次のように書く、「アア彼は融々和喜の中に在り、然れども我等は彼の基礎を定めたる事業を大成せんがために、力を尽くして尚此世に在り」と。

（新島の墓については、拙文「新島襄の墓」『新島研究』第七十号に詳述した）。

（本部社史資料室長）